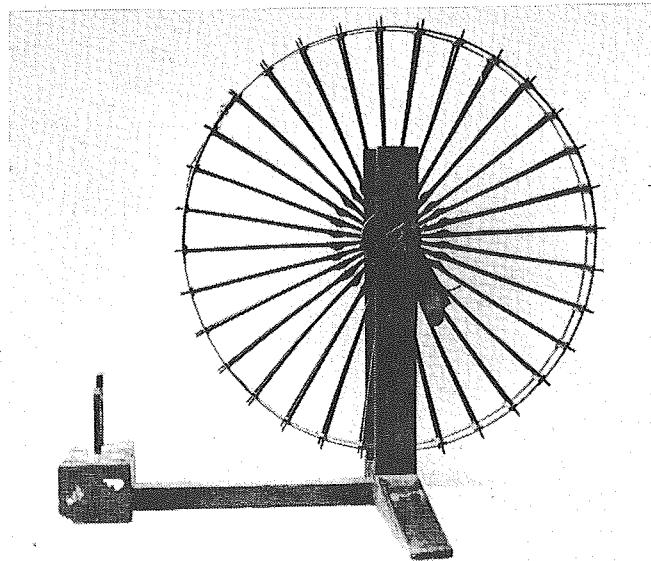


琉球政府立博物館

館 報



1971

No.4

琉球政府立博物館

目 次

序	外間正幸
沿革	1
博物館案内図	2
機構及び職員構成	3
予算の推移	4
所蔵資料現在高	4
資料購入点数の推移	5
当館所蔵の指定文化財	5
施設使用状況	6
入観者数	8
主なる来館者	9
来館学校団体名	10
主なる新収蔵品写真	14
新収蔵資料	16
新収蔵図書	17
月別消費電力量及び水道使用量	21
博物館主催行事について	22
1. 民具特別展	22
2. やきもの資料展	23
3. 筒引びんがた展	25
4. 指定文化財展	26
職員の活動状況	27

研 究 及 び 調 査 報 告

宮古譲書事件の流罪者たち	上江洲均	28
－前島尻与人波平恵教とその娘メガを中心として－		
壺川窯出土陶片調査略述	宮城篤正	36

※ 表紙写真：ヤーマ（糸車）

序

今年は、博物館の環境整備を重点目標に政府にも当った。その結果、周囲の柵施設の予算をやつと獲得した。だが、示達の段階で政府の財源落込みにより、実現できなかつたのは残念である。

職員で草刈り等をして美化に努力はしたが、予算がなく未だ一本の樹木も植えてない。それでも、地元のガールスカウトやボーイスカウトをはじめ、ジョージHケア博士並びに沖縄タイムス社の花壇の寄贈等、篤志家の御厚意により、殺風景の前庭もすこしほとぎすになつた。深く感謝している。

博物館は世界各国の人々が訪れる。しかも吾々の祖先の文化遺産を保存し、公開する一大殿堂である。その前庭をいつまでも荒廃に帰したまゝでは、祖先に対して申しわけない。それどころか、県民の恥辱である。

かつて、バジルホール、ペルリ、柳宗悦氏ら多くの人が、たぐいなき首里の町の美しさを絶賛した。本土復帰の前に、せめて前庭だけでも整備したいものだ。どうか皆様の御力添えをいたゞきたい。

第二の重点目標である倉庫や台帳の整備についても、設備不充分ながら復帰に備え、職員一丸となり整備にとりくんでいる。其他職員の研究活動等くわしくは本館報をご覧願いたい。第4号発刊にあたり一言ごあいさつを申し述べる次第である。

1970年12月30日

琉球政府立博物館長

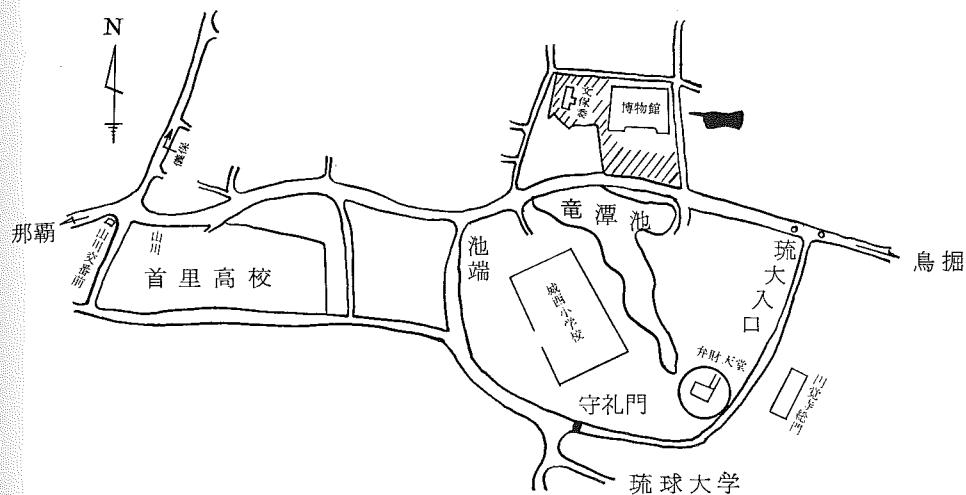
外間正幸

沿　　革

(1970年1月～12月)

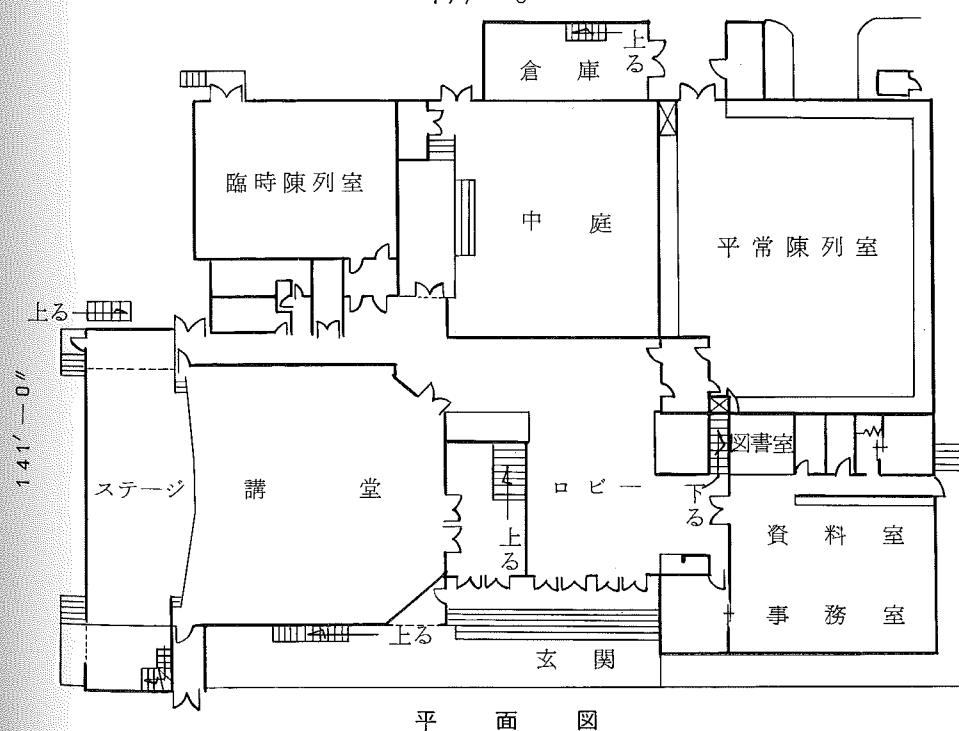
- 1月 本陳列場において、年一回の大陳列替えを行なうとともに、第二陳列室では当館所蔵の全民具資料を網羅して「民具特別展」を開催。また、中央ロビーには館所蔵の中国青磁、染付を主にして、古伊万里染付、スンコロク等の古陶磁を始めて総括して陳列した。
- 2月 米国スマソニアン博物館主催の「ペルリ提督東洋探検」展に貸出した「首里那覇島瞰図八曲屏風」及び仲宗根嶂山筆「首里城図」二件無事返納さる。
- 3月 産経新聞社主催、日本放送、フジテレビ、文化放送後援によって開催された「帰つてくる沖縄」展に館所蔵の資料70余点を出品。
- 4月 博物館々報第三号を発行。
- 7月 東京サントリー美術館と共に「日本古美術展」を当館において開催する計画をたてる。
- 8月 ヤチムン研究会と共に「やきもの資料展」を開催。（2ヶ月）
- 9月 びんがた風呂敷を中心とした「筒引びんがた特別展」を開催。（1ヶ月）
- 10月 沖縄タイムス社及び米人沖縄歴史研究家ジョージ・H・ケア博士より当館前庭に花園の贈呈があった。
- 11月 琉球政府文化財保護委員会と共に「指定文化財展」を開催。

博物館案内図



見取図

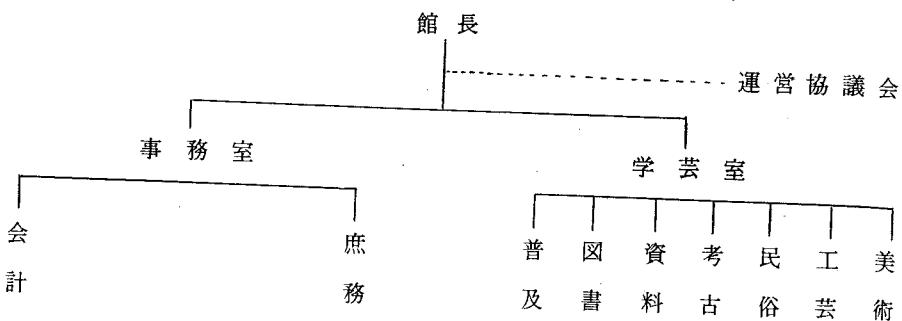
197' - 8"



平面図

機構及び職員構成

1 機 構



2 職 員 構 成

職名	職員数	職員名
館長	1	外間正幸
学芸職	4	大城精徳(美術) 玉城盛勝(考古)
事務職	4	崎山孝子 仲松正子 黒島惇 与儀ウシ
電気職	1	
作業職	1	

3 職員の移動状況

退職 阿波連本敬 大城美椰子
 転出 知念朝健(総務局・総務課へ)

転入 崎山孝子(北部農林高等学校より) 仲松正子(宮古連合区教育委員会より)
 新人 津波古久子 亀山富子

4 博物館運営協議会委員

学校教育関係	末吉安久(首里高等学校教諭) 大山盛幸(首里山川町自治会長)
社会教育関係	国吉順質(那覇連合区教育委員会教育次長) 与那霸修(文教局社会教育課長)
学識経験者	徳山清志(南部連合区教育委員会社会教育課長) 池村恵興(文教局指導部長) 源武雄(琉球政府文化財保護委員長) 山元恵一(琉球大学美術工芸科助教授) 山城善三(沖縄観光協会専務理事) 阿波根朝松(興南高等学校長)

予 算 の 推 移

年 度	定 員	当初予算額	内 容		
			運 営 費	資料購入費	事 業 費
1967 年度	7	41,403	18,635	1,500	21,268
1968	11	62,463	29,473	1,500	31,490
1969	11	45,419	39,299	1,500	4,620
1970	11	67,961	41,761	1,200	25,000

所 藏 資 料 現 在 高

(図書資料を除く)

1970 年 6 月 30 日現在

分 類 \ 収 藏 别	購 入	寄 贈	合 計
A 絵 画	44 (60)	29 (29)	73 (89)
B 書 跡	50 (69)	99 (114)	149 (183)
C 彫 刻	0 (0)	67 (182)	67 (182)
D 建 築	0 (0)	3 (5)	3 (5)
E 陶 磁 器	283 (376)	597 (683)	880 (1,059)
F 染 織	193 (670)	90 (142)	283 (812)
G 漆 器	117 (151)	66 (123)	183 (274)
H 金 工	6 (6)	57 (66)	63 (72)
I 歴 史	0 (0)	6 (6)	6 (6)
J 貨 幣	1 (1)	25 (46)	26 (47)
K 楽 器	4 (4)	12 (15)	16 (19)
L 装 身 具	25 (135)	34 (46)	59 (181)
M 民 俗	73 (114)	288 (338)	361 (452)
N 考 古	0 (0)	31 (78)	31 (78)
O そ の 他	1 (1)	8 (10)	9 (11)
X 自 然	0 (0)	13 (38)	13 (38)
合 計	797 (1,587)	1,425 (1,921)	2,222 (3,508)

- 注 1. () 内は点数を表わす。 () の前は件数とする。30件(100点)の意
 2. 従来の蒐集は寄贈に組入れた。

資料購入点数の推移

(1961年~1970年)

分類 \ 年度	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	合計
A 絵画	4(18)	1(1)	5(5)	1(1)		1(1)					12(26)
B 書跡	5(6)		1(1)	14(16)							20(23)
C 影刻										0	0
D 建築										0	0
E 陶磁器	5(6)			1(1)	3(3)		2(2)	21(24)	13(14)		45(50)
F 染織	4(4)	1(1)		5(5)		2(2)					12(12)
G 漆器	10(11)	1(1)	11(11)	6(6)	3(3)	6(10)	2(3)	2(2)	3(3)	44(50)	
H 金工				1(1)		1(1)					2(2)
I 歴史											
J 貨幣											
K 楽器											
L 装身具											
M 民俗	1(1)	1(1)						1(1)	16(19)		21(24)
N 考古											
O その他											
X 自然									1(1)		1(1)
合計	29(46)	4(4)	6(6)	32(34)	13(13)	6(6)	12(16)	24(28)	32(36)	3(3)	161(192)

当館所蔵の指定文化財

特別重要文化財

名 称	種 别	指定年月日	備 考
木彫円覚寺白象並びに趣意書 木札	彫 刻	1958. 3. 14	全長 120cm 頭高 61.2cm 脊廻り 93.9cm
世持橋勾欄羽目	"	"	高さ 33.3cm 横 80.6cm
志多伯開鐘(三味線)	工芸	1955. 5. 23	全長 77.2cm 糸蔵 3.5cm 重量 440g
旧首里城正殿前梵鐘 評定所 格 護 定本 おもうそうし	"	1958. 3. 14	高さ 154.5cm 口径 94cm 重さ 600kg
評定所 格 護 定本 混効驗集	典籍	"	22巻
	"	"	縦 25.5cm 横 20cm 枚数 227枚

重要文化財

名 称	種 别	指定年月日	備 考
玉陵石彫獅子	彫 刻	1956. 12. 14	2基 各高さ 1.17m 脊廻り 1.21m 全面黄金張
聞得大君御殿雲龍黄金簪	工芸	"	全長 28.4cm 直径 11cm 重量 21g
黒塗螺鈿遊雁絵大文庫	"	"	高さ 16cm 縦 41cm 横 31cm 重さ 2.29kg
黒塗堆錦山水絵大文庫	"	"	高さ 14cm 縦 40.8cm 横 31.7cm 重さ 3.45kg
黒塗螺鈿雲龍文内金箔蓋付椀	"	"	3口 高さ 11.8cm 重さ 160g 直径 12cm
三味線「江戸与那」 宮古島下地の首里大屋子への 辞令	古文書	"	全長 80cm 心長 21.6cm 糸蔵 4.8cm 重量 503g 縦 28.5cm 横 82.5cm
評学所 格 護 定本 中山世鑑	典籍	"	6巻
評定所 格 護 定本 中山世譜	"	"	19巻

施設使用状況

1. 講 堂

1970年1月～12月

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名	人 員
1. 9	万国博の映写会と講演会	通産局観光課	1,300
14	沖縄の文化講演会	インサイツオキナワ	50
25	文化祭公演	浦添高等学校	1,200
2. 11	沖縄の文化講演会	インサイツオキナワ	60
14～15	学習発表会	城西小学校	2,000
18	学芸会	沖縄盲学校	600
26	記録映画の鑑賞会	カデナ将校婦人クラブ	50
3. 4	古典舞踊の鑑賞会	琉球遠洋鮪漁業協会	100
12	沖縄の文化講演会	インサイツオキナワ	200
15	ギター演奏会	琉大短大部ギタークラブ	200
20	戦後中国で発見された陶磁器のスライド鑑賞会	琉球陶磁研究会 博物館	60
29	国自費新入生の壮行会	琉球育英会	600
4. 8	沖縄の文化講演会	インサイツオキナワ	30
11	記録映画の鑑賞会	文化財保護委員会	200
5. 1	記録映画の鑑賞会	仲西中学校	400
9	民俗芸能の一般公開	文化財保護委員会	50
5. 24	記録映画の鑑賞会	今帰仁婦人会	50
6. 9	高令者学級指導者研修会	文教局社会教育課	150
26	記録映画の鑑賞会	大平養護学校	25
7. 11	学術発表会	沖縄考古学会	100
18	軽音楽演奏会	琉大生活協同組合	400
8. 9	総会	沖縄民俗同好会	100
15	青年学生うたごえ祭典	在本土沖縄県学生連絡会議	400
9. 19	高校英語弁論南部地区予選大会	沖縄青年会議所	100
24～25	沖縄文化保護協会設立に伴う協議会	文化財保護委員会	100
11. 1～7	組踊の記録映画及び実演の一般公開	文化財保護委員会 博物館	1,000
21	高校生の弁論と映画の集い	沖縄県高教組	400

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名	人 員
22 12. 4 5. 6. 13 17 19 26	慈 善 コンサート 開学 20 周年記念式典 琉 大 祭 の 公 演 組踊の記録映画及び保持者の 演技鑑賞会 お ゆ う き 会 全沖縄高校家庭クラブ研究発 表会	沖縄社会福祉協議会 琉 球 大 学 琉 球 大 学 文化財保護委員会 首里カトリック幼稚園 全沖縄高校家庭クラブ連盟	600 400 1,200 40 500 600

2. 第 2 陳 列 室

1970 年 1 月～ 12 月

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名
1. 21～ 6. 30	民 具 特 別 展	博 物 館
7. 3～ 8. 30	や き も の 資 料 展	ヤ チ ム ン 会 ・ 博 物 館
9. 5～ 9. 13	洋 画 二 人 展	大 浜 用 光 ・ 城 間 喜 宏
9. 22～ 10. 16	筒 引 びんがた 展	博 物 館
10. 18～ 10. 25	旺 玄 展	沖 縄 旺 玄 会
11. 1～ 11. 14*	文 化 財 写 真 展	文 保 委 ・ 博 物 館
11. 17～ 11. 22	織 物 個 展	大 城 志 津 子 会
11. 25～ 12. 13	赤 土 展	赤 士 会

3. そ の 他

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名	使 用 場 所
9月～ 12月 11. 3	公務員英語講座のための駐車 首里文化祭演芸大会	英 語 センター 首里文化祭実行委員会	前 庭 前 庭

入館者数

参観者統計 (1961~1970)

年別	人數	備考
1961	94,097	
1962	119,437	
1963	119,281	
1964	150,935	
1965	89,593	
1966	135,386	
1967	229,464	
1968	97,062	
1969	100,110	
1970	100,238	
計	1,235,603	

月別参観者 (1970.1~12)

項目 月	大人	学生	生徒	計	開館日数	1日平均	備考
1	2,753	283	922	3,958	21	188	
2	5,296	663	1,603	7,562	24	315	
3	5,584	2,117	3,107	10,808	25	432	
4	4,808	530	2,090	7,428	23	323	
5	3,464	203	4,333	8,000	24	333	
6	3,592	331	1,914	5,837	24	243	
7	3,685	1,666	1,343	6,694	27	248	
8	4,636	2,563	1,879	9,078	25	363	
9	3,172	336	812	4,320	24	180	
10	4,441	448	6,032	10,921	26	420	
11	9,036	753	11,978	21,767	25	871	
12	2,755	411	699	3,865	24	161	
計	53,222	10,304	36,712	100,238	292	343	

主なる来館者

- 2月 文部省大学々術局文部事務官、長谷川寛氏。全宗形郁夫氏。全須田八郎氏。日本経済教育センター専務理事、森龍太郎氏。国際ロータリーガバナンサー。佐々木秀一氏。西武百貨店吉岡栄太郎氏。全仲根憲一氏。文化庁文化財保護部、平野邦雄氏。全平城京跡発掘調査部沢村仁氏。第12回文春講演会、江藤淳氏。三好徹氏。永井路子氏。高等弁務官 ランバート中将の父君 Mr. Evelyn R. Brigham。
- 3月 北海道教職員組合本部、橋本清吉氏。町田治雄氏。農林局南部管林署長、眞栄城守金氏最高裁判所事務次長、吉田豊氏。倉敷民芸館長、外村吉之介氏。他20名、参議院議員、鶴園哲夫氏。全涉谷邦彦氏。全木村修三氏。全中村喜四郎氏。全川村清一氏。立正校成会理事、川平康太郎氏。陶磁研究家、小山富士夫氏。古美術古陶器株式会社不言堂、坂木五郎氏。文化庁長官室庶務課長、石川二郎氏。文部省社会教育局審議官、林部一二氏。繭山龍泉堂、繭山順吉氏。全井垣春雄氏。駐日ノルウェ大使 Mr. Knut Thommessen。日本民芸館長、浜田庄司氏。東京教育大学、光定道次氏。文部省事務官、西野間幸雄氏。名古屋大学学生部次長、牧島久雄氏。
- 4月 スミソニアン博物館編集局長、ピノー氏。NHKアナウンサー、井上浩氏。福岡市教育委員会、三島格氏。織研新聞社編集部、佐藤信義氏。伊勢丹研究所室長、安岡大一氏。Mor写真室、森下一徹氏。東京平和委員会常任理事、森脇靖彦氏。This is Japan 編集長、間宮達男氏。
- 5月 千葉県立安房水産高校教諭、辻元洋一氏。毎日書道展審査員、種谷扇舟氏。書道芸術院理事審査会員、小島白洲氏。平凡社大陽編集長、馬場一郎氏。生成社代表、中島邑水氏。第一回沖縄書道教育視察団、浜田徳兵衛氏。講談社美術図書出版部、鋤柄聰氏。
- 6月 文部省大臣官房、岩田俊一氏。日本政府沖縄地方対策庁沖縄事務局、田淵武臣氏。日本写真家協会々員、杉村恒氏。中琉文化経済協会理事長、方治氏。鹿児島大学講師、三木靖氏。日本写真家協会々員、矢萩和氏。駐日オーストラリア大使館広報局次長、武田吉郎氏。琉球大学講師、喜舎場一隆氏。中国政府行政院国際経済合作発展委員会参事、曾潤環氏。江雲釣氏。黄天沢氏。蘇振平氏。劉振世氏。神奈川新聞記者、渡部允氏。
- 7月 サントリーミュージアム広報室長、の場晴氏。館員、土屋良雄氏。全木島章氏。日米琉諧問委員会参事官、間淵直三氏。沖縄復帰準備委員会日本政府代表事務所公使 吉岡一郎氏。沖縄経済開発研究所、喜久川宏氏。琉球政府行政主席、屋良朝苗氏。外務省アメリカ局北米第一課長、千葉一夫氏。韓国金州市国立全北大学教授、洪顯植氏。衆議院議員、湊徹郎氏。横浜国立大学教授、宮城栄昌氏。衆議院議員、松野幸泰氏。全鍛冶良作氏。全後藤義隆氏。福岡市立福岡商業高校教諭、丸田淳氏。東京都知事、美濃部亮吉氏。
- 8月 三重大学、神戸文夫氏。明治大学教授、萩原龍夫氏。日本民俗学会理事、亀山慶一氏。全渡辺良吉氏。東京教育大学文学部助手、宮田登氏。全福田アジオ氏。山田書院、中島尚志氏。立教大学博物館学研究室、岸上興一郎氏。琉球政府立法院議員議長、星克氏。ハワイ大学、リチャード・ピアソン博士。民俗学者、最上孝敬氏。大蔵省理財局、市橋喜氏。全久

- 恒智宣氏。米国陸軍省次官補、ワード氏。大阪外国語大学教授、畠中敏郎氏。
- 9月 最高検察庁、天野武一氏。
- 10月 劇団文化座、佐々木愛氏。朝日テレビニュース社、村瀬宗雄氏。国立国会図書館、酒井悌氏。国立科学博物館、長谷川善和氏。沖縄放送協会、飯島博氏。四天王寺女子短大、今津玲子氏。九洲文化協会事務局長、加藤稻穂氏。
- 11月 北九州市芳野野病院々長、芳野敏章氏。朝日新聞東京本社、立石亥三美氏、米国民政府広報局、Perry・E・Peters中佐。岡造船鉄工所社長、岡義太郎氏。衆議院議員、西中清氏。長崎県民生労働部長、北島靖氏。堀製作所、森達男氏。日本民芸協同会長、三宅忠一氏。全副理事長、本瀬秀雄氏。OHK理事、矢野輝雄氏。埼玉大学助教授、阪上順夫氏。白扇書道会長、種谷扇舟氏。和歌山県副知事、中沢哲夫氏。全議会議長、前田増一氏。仙台市長、島野武氏。東海大学短大部長、谷村功氏。沖縄県高校野球連盟理事長、佐敷興勇氏。宮城県知事、山本壮一郎氏。全議会議長、村松哲治氏、全亘理郡亘理町長、武田伸郎氏。最高裁判所事務局、簗原茂廣氏。全山本義守氏。東京家庭裁判所、北本賢一氏。広島大学学長、飯島宗一氏。全図書館長、内海巖氏。全助教授、沖原豊氏。衆議院社会労働委員会調査室主任調査員、山井武夫氏。日本民俗学会長、東大教授、窪徳忠氏。染色家、芹沢圭介氏。沖縄北方対策庁調整部総括参事官、渡辺和夫氏。南日本新聞社専務、川越政則氏。全事業部、畠中親則氏。文化庁長官々房、金田智成氏。全中西貞夫氏。東京教育大助教授桜井徳太郎氏。千葉県地方史研究協議会常任委員、西垣晴次氏。相模女子大教授、森本元子氏。東京大学教授、渡辺直経氏。国立科学博物館古生物学研究室長、谷川善和氏。お茶水女子大助教授、田辺義一氏。文部省大臣官房、萩原博達氏。全大学々術局、青柳徹氏。日本学術会議会員、守屋典郎氏。

来館学校団体名

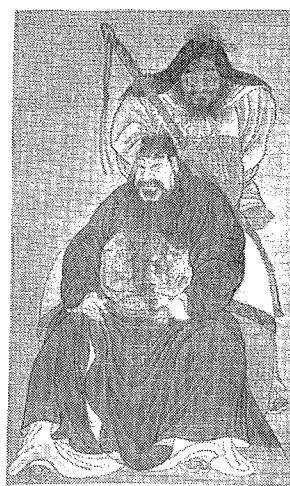
月	学校団体名	人数	月	学校団体名	人数
1970 1月	東海女子短期大学	20	2月	Kubasaki H S	170
"	Camp Hauge school	293	3月	尚絅女学院短期大学	60
"	コザ市中の町小学校	30	"	Camp Kue	229
"	美里村美里小学校	30	"	玉城村船越小学校	59
"	浦添市鏡が丘養護学校	49	"	大里村大里南小学校	121
"	Machinato school	204	"	読谷村古堅小学校	185
"	Adams E school	163	"	嘉手納村屋良小学校	150
2月	名護市名護高校	30	"	読谷村喜名小学校	81
"	浦和実業学園商業高校	405	"	アイゼン・ハワイ小学校	142
"	那覇市那覇養護学校	44	"	那覇市那覇商業高校	70

月	学校団体名	人数	月	学校団体名	人数
3月	武蔵野高等学校	330	6月	名護市三原中学校	42
	カレッジツアーワーク	440		金武村金武中学校	240
	NEC第7回学生ツアーワーク	150		浦添市大平養護学校	27
	広島県海洋少年団	70		那覇市那覇養護学校	22
	日本海洋少年団	150		熊本八代第一高校	623
	教教研修団	48		伊平屋村野甫中学校	35
4月	那覇市沖縄工業高校	32	7月	伊是名村伊是名中学校	145
	" 与儀小学校	400		伊平屋村伊平屋中学校	91
	浦添市浦添小学校	200		那覇市那覇高等学校	44
	" 浦添中学校	498		アイゼンハワー	23
	" 神森小学校	194		与那城村宮城小学校	65
	西原村西原中学校	244		新湯高等工学院	132
5月	与那原町与那原小学校	216		カレッジツアーワーク	60
	南風原村南風原中学校	250	9月	栗国村栗国中学校	50
	浦添市仲西中学校	500		平良市第一小学校	30
	久米島具志川中学校	130		平良市平良北小学校	29
	知念村久高小学校	34		国頭村辺土名小学校	77
	南大東村南大東中学校	57		座間味村阿嘉中学校	33
6月	那覇市識名小学校	306		浦添市鏡が丘養護学校	51
	石川市宮森小学校	125		熊本歯科衛生士学院	44
	久米島久米島中学校	65		那覇市首里高等学校	34
	那覇市高良小学校	300		(宮崎県)都城高等学校	240
	宜野湾市嘉数中学校	416		宜野座村漢那小学校	22
	名護市大宮小学校	122		本部町瀬底中学校	40
7月	与那原与那原中学校	200		金武村金武小学校	273
	国頭村国頭中学校	150		諾谷村諾谷中学校	305
	浦添市マチナト米人小学校	231		豊見城村豊見城中学校	324
	南風原南風原小学校	247		宜野座村宜野座中学校	105
	大宜味村喜如嘉中学校	53		本部町伊野波中学校	41
	渡名喜村渡名喜中学校	35		勝連村浜中学校	35
8月	今帰仁村古守利中学校	42		国頭村楚洲中学校	19
	国頭村北国中学校	35		嘉手納村嘉手納中学校	340
	ズケラン米人小学校	56		鹿児島南高校	40
	那覇市沖縄聾学校	85		伊江村嘉児島中学校	228
	石川市石川中学校	419		具志川市あげな中学校	450

月	学校 团体 名	人數	月	学校 团体 名	人數
10月	(福岡県) 久留米商業高等学校	120	11月	コザ市 コザ中学校	400
"	金武村 嘉芸小学校	105	"	名護市 有銘中学校	27
"	恩納村 仲泊小学校	47	"	美里村 美東中学校	210
"	本部町 崎本部中学校	40	"	石川市 城前小学校	110
"	恩納村 仲泊中学校	60	"	美里村 高原小学校	95
"	恩納村 恩納小学校	82	"	糸満町 米須小学校	112
"	宜野座村 宜野座小学校	88	"	名護市 東江小学校	120
"	南風原村 南風原小学校	287	"	マチナト米入学校	25
"	本部町 本部中学校	200	"	美里村 北美小学校	219
"	広島福山高等学校	229	"	コザ市 コザ小学校	173
"	コザ市 中の町小学校	38	"	宜野座村 松田小学校	50
"	恩納村 恩納中学校	78	"	那霸市 城南小学校	17
"	北中城村 北中城小学校	499	"	宜野湾市 普天間第2小学校	141
"	知念村 知念中学校	140	"	コザ市 山内中学校	317
"	名護市 三原小学校	23	"	福岡電波高校	13
"	糸満町 三和中学校	290	"	Eisenhower	61
	Kubasaki -9	31	"	大宜味村 大宜味中学校	29
"	北谷村 北玉小学校	125	"	那霸市 松島中学校	200
"	宜野湾市 普天間中学校	31	"	具志川市 川崎小学校	199
"	宜野湾市 宜野湾小学校	110	"	宜野湾市 普天間小学校	231
"	国頭村 奥小学校	36	"	今帰仁村 湧川小学校	43
"	名護市 真喜屋小学校	48	"	玉城村 百名小学校	60
"	勝連村 平敷屋小学校	120	"	名護市 源河小学校	37
"	北谷村 北谷小学校	120	"	本部町 本部小学校	190
11月	名護市 久志小学校	34	"	具志川市 兼原小学校	190
"	与那城村 桃原小学校	21	"	名護市 天仁屋小学校	25
"	コザ市 越来中学校	500	"	読谷村 読谷小学校	126
"	大島高校	39	"	コザ市 諸見小学校	269
"	粟国村 粟国中学校	54	"	向 上高	校 200
"	名護市 名護中学校	450	"	名護市 屋部中学校	140
"	糸満町 高嶺中学校	110	"	与那城村 与那城小学校	261
"	那霸市 壺屋小学校	200	"	カデナ Kadena Elem school	158
"	名護市 名護中学校	44	"	今帰仁村 兼次中学校	115
"	名護市 屋我地中学校	61	"	名護市 安和小学校	48
"	美里村 宮里小学校	88	"	恩納村 喜瀬武原中学校	48

月	学校団体名	人數	月	学校団体名	人數
11月	上本部村 上本部中学校	114	11月	東村高江中学校	20
"	今帰仁村 天底小学校	70	"	那霸市城北小学校	25
"	浦添市仲西小学校	408	"	与那城村平安座小学校	140
"	カデナ基地小学校	102	"	具志頭村具志頭小学校	120
"	石川市石川中学校	360	"	本部町伊豆味小学校	44
"	具志川市高江洲中学校	160	"	美里村美里中学校	340
"	大里村大里北小学校	50	"	今帰仁村今帰仁小学校	92
"	石川市伊波小学校	27	"	今帰仁村今帰仁中学校	312
"	名護市稻田小学校	60	12月	大謝名 Christ The king school	63
"	那霸市首里高校	15	"	東村東中学校	48
"	国頭村奥間小学校	54	"	大宜味村塩屋中学校	52
"	大宜味村津波中学校	34	"	Kubasaki H.S	28
"	名護市嘉陽中学校	29	"	大坂府玉造経理専門学校	30
"	本部町伊豆味中学校	48	"	今帰仁村北山高等学校	45
"	津堅中学校	53			

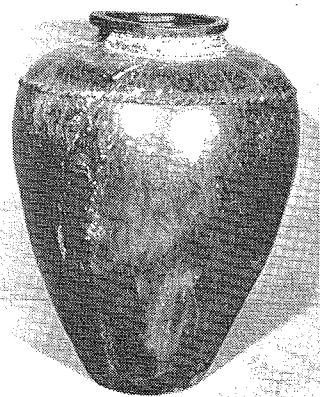
主なる新収蔵品写真



關帝王



時茂書



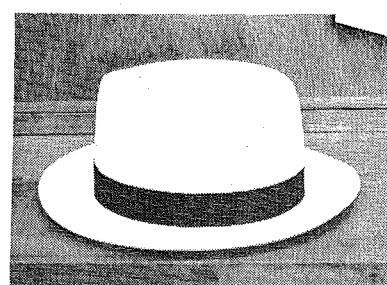
繩目文甕



壺屋焼甕



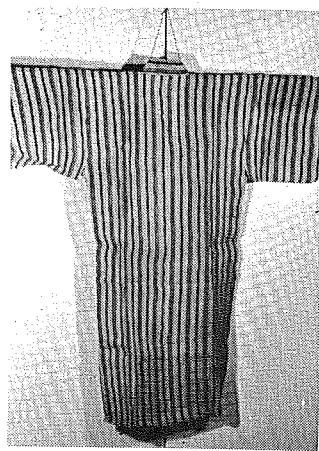
鉢



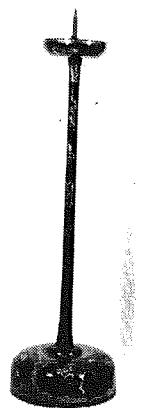
パナマ帽



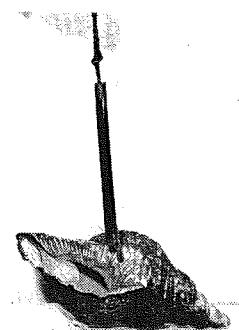
胴 衣



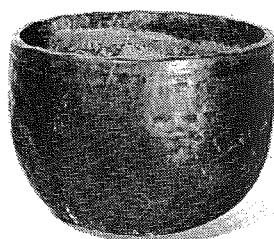
芭 蕉 経 稿 着 物



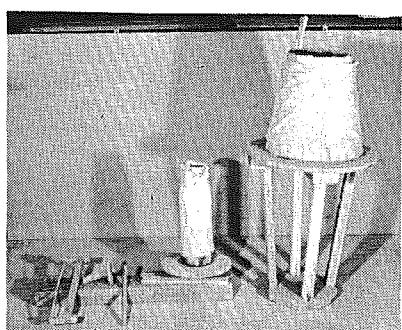
琉球塗燭台



プラヤックン



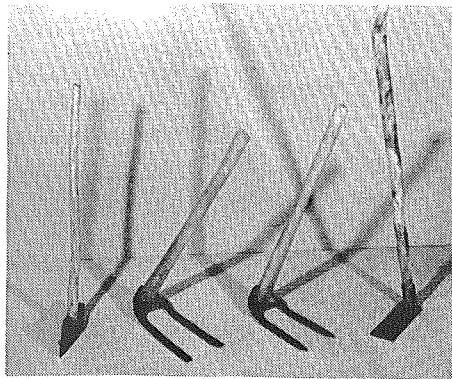
鉢



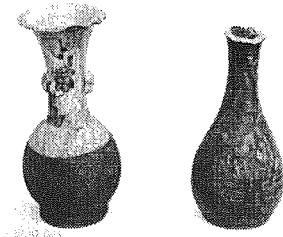
沖繩瓦製作具一式



朱塗薄絵東道盆



タイマ - 他



花 活 他

新 収 藏 資 料

購 入 の 部

1970. 1. 1～12. 31

分類	名 称	数 量	備 考
漆 器	朱塗山水絵堆錦文庫	1	
"	朱塗山水絵堆錦小文庫	1	

寄 贈 の 部

分類	名 称	数 量	寄 贈 者 名 (敬称略)
絵 画	関羽図 他	2	米 国 EDWIN・A・BUCHANAN
書 跡	国王頌徳碑択本	1	福岡県 本 田 正 一
陶 磁 器	スンカンマカイ 他	6	与那城村 長 堂 察
"	対 瓶	1	那霸市 松 川 八 重
"	油 壺 他	3	美里村 島 袋 英 照
"	繩 目 文 甕	1	美里村 金 城 昇 雄
"	鉢	1	那霸市 大 嶺 哲 雄
"	甕	3	南風原村 普 天 間 敏
"	対 瓶 他	7	石垣市 西 大 夕 千 高 永

分類	名 称	数 量	寄贈者名(敬称略)
陶磁器	甕(壺屋焼)	1	那霸市 平 良 専 明
"	素焼七輪他	3	与那城村 浦 添 昭 次
染 織	芭蕉経縞着物	1	那霸市 長 嶺 紀 清
"	胴 衣	1	美里村 島 袋 タマチ
漆 器	琉球塗燭台	1	東京都 薩 山 順 吉
金 工	鉢	1	那霸市 上 原 忠 雄
歴 史	琉球国図(写)	1	岡山県 原 田 禹 雄
貨 幣	日本銀行券(紙幣)他	3	那霸市 大 見 謝 恒
装身具	パナマ帽	1	那霸市 安 谷 屋 正 量
民 俗	沖繩瓦製作具一式	1	南風原村 奥 原 宗 八
"	プラヤックン	1	浦添市 サムエル・北村
"	フクター	1	大宜味村 平 良 慶 朝
"	タマター他	4	与那城村 外 間 ツ ル
"	ティール	1	伊平屋村 仲 川 蒲
考 古	瓦	1	那霸市 松 久 宗 悅
写 真	「万葉集」スライド (テープ解説書付)	1	東京都 光和スライドKK

新 収 藏 図 書

購 入 の 部

1970.1.1~12.31

書 名	数 量
仲原善忠選集(上・中・下)	各1冊
琉球史辞典	1
日本民俗資料事典	1
戦後資料 沖繩	1

書 名	数 量
おもろそうし 辞典 総索引	1
沖繩の民具(コピー)	1
公務員必携	1

寄贈の部

1970. 1. 1 ~ 12. 31

書名	部数	寄贈者	書名	部数	寄贈者
Ryukyu Report 1962	4	ハワイ大学	日本美術年鑑(1968)	1	美術研究所
The prehistoric Southern Islands and East China Sea Areas	2	" "	博物館研究 第42巻	1	日本博物館協会
SPECIAL TAIWAN SECTION	2	" "	釧路市立郷土博物館	4	釧路市立郷土博物館
Ryukyu Survey 1960	2	" "	近畿民俗	3	近畿民俗学会
岡山民俗 86 会報 58	1	岡山民俗学会	夏の季節	2	高倉幸一
民俗文化 74~85	9	滋賀民俗学会	" Old Bruin "	1	スミソニアン博物館
新春の日本画・富士	1	山種美術館	Commodore Matthew Calbraith Perry	1	北海道立美術館
MUSEUM	4	東京国立博物館	北海道立美術館年報	1	昭和43年度
Archaeology of the Ryukyu Islands	1	ハワイ大学	地獄極楽の美術	1	大阪市立博物館
オキナワグラフ	10	オキナワグラフ社	装	1	"
上杉謙信の手紙	1	花ヶ前盛明	花と民俗行事	1	"
芸術生活	12	関本行男	正月いまむかし	1	"
文教時報	2	文教局	文楽人形とかしら	1	"
沖縄教育の概観	1	"	熊野三山の秘宝	1	"
あるくみるきく	11	日本観光文化研究所	繩文文化	1	"
研究紀要第一冊	1	大阪市立博物館	旅の風俗	1	"
沖縄ワイドカラー日本20	1	世界文化社	のれんと看板	1	"
沖縄民俗	1	琉大民俗研究クラブ	羽黒山伏と即身仏	1	"
ふるさとの謡	1	比嘉普剛	上方文化	1	"
研究紀要 第5集	1	小松市立博物館	近世日本と世界地図	1	"
袱紗風呂敷	1	宮井株式会社	北摂の古社寺	1	"
郷土 第2号	1	宮古高校郷土研究クラブ	金銅仏展	1	中川伊作
陳氏家譜	1	陳氏康栄会	具志川市誌	1	具志川市役所
外客アンケート集計年報	1	那覇市商工観光課	薩摩国分寺跡第2次	1	鹿児島県教育委員会
第6集	1	那覇市役所	発掘調査報告書	1	"
市政早わかり	1	茨城県立美術博物館	社会教育の現状	1	"
茨城県立美術博物館要覧	1	茨城県立美術博物館	昭和44年度	1	"
69	1	朝日新聞社	串川、中津川流域の民俗	1	神奈川県立博物館
アサヒカメラ 増大号	1	文教局	神奈川県立博物館	1	"
教育年報	1	琉球電信電話公社	民俗	1	"
沖縄の電信電話事業史	1	文化財保護委員会	近代日本画への招待(5)	1	山種美術館
沖縄の民俗資料 第1集	1	鎌倉芳太郎	墨の美	1	サントリー美術館
古琉球紅型 第2期 全	1	尚 証	髪と化粧	1	"
松山王子尚順遺稿	1	下地一秋	目黒寄生虫館ニュース No. 106	1	目黒寄生虫館
沖縄戦記録写真集	1		THE RESEARCH BULLETIN OF THE MEGURO PARASITOLOGICAL MUSEUM 第4号	1	大阪市立自然科學博物館
			大阪市立自然科学博物館 々報3	1	大阪市立自然科學博物館

書名	部数	寄贈者	書名	部数	寄贈者
東洋陶磁展目録	1	林屋晴三	文部省史料館報	3	文部省史料館
学校基本調査報告書 1969学年度	1	文教局	鏡作について他1	2	佐藤虎雄
古清水	1	京都国立博物館	琉球警察統計書	1	琉球警察本部
京の人形	1	"	浜松市半田山古墳群(B群)調査記録1	1	浜松市教育委員会
金剛力士	1	"	全国郷土玩具目録	1	成田山史料館
琉銀ニュース 1970.3	1	琉球銀行調査部	考古資料解説目録	1	成田山靈光館
大阪市立博物館館蔵品目録	1	大阪市立博物館	沖縄関係文献目録	1	北九州市立若松図書館
歓楽郷辻情話史集集成版	1	沖縄郷土研究文化研究会	全国書画展覧作品集	1	国立歴史博物館
東洋陶磁展目録	1	東京国立博物館	奈良(日本の旅10)	1	鉢座右宝刊行会
阿波の自然	1	徳島県博物館	日本の伝統織物	1	大野力
長崎県立美術博物館館報	1	長崎県立美術博物館	伝統工芸人間国宝	1	杉村恒
調査報告書	1	鹿児島県明治百年記念館建設調査室	嘉悦学園60年史他1	2	嘉悦学園
那覇市史 第2巻中の1	1	那覇市役所	近代沖縄の歴史と民衆 月白き夜半 —原清の信仰—	1	沖縄歴史研究会
那覇市史 第2巻中の2	1	"	北方文化博物館他2	3	北方文化博物館
世界民族美術展	1	田中義広	丹波第3号	1	丹波民俗研究会
沖縄宮古・八重山の唄と踊り	1	"	美哉中華	1	美哉中華書報月刊社
混効験集 校本と研究	1	角川書店	日本古美術名品展他2	3	藤田美術館
徳之島採集手帳	2	徳之島郷土研究会	沖縄の文化財	2	大同印刷工業株
全国科学博物館施設一覧	1	国立科学博物館	大阪市立博物館報 No.9	1	大阪市立博物館
立正大学文学部論叢 34	1	立正大学文学部	ひめゆりの塔	1	石野径一郎
高台寺蒔絵	1	京都国立博物館	博物館研究 第43巻第1号	1	日本博物館協会
天球院の障壁画	1	"	自然科学と博物館	6	国立科学博物館
津山郷土館収蔵品目録	1	津山市立津山郷土館	法然上人絵伝	1	京都国立博物館
美作の慶長検地帳	1	"	群馬県立博物館史 —10年のあゆみ—他2	3	群馬県立博物館
富士山	2	県立富士国立公園博物館	父兄が支出した教育費	1	文教局
那覇市統計書 1969年度	1	那覇市	郷土	1	沖縄学生文化協会
大阪市立博物館報 1970年	2	大阪市立博物館	ヤチムン研究会誌 (創刊号)	3	ヤチムン研究会
EXPLORERS OF THE PACIFIC	1	BISHOP MUSEUM	千葉市の文化財	1	加曾利貝塚博物館
徳島市入田町入田瓦窯跡 調査概報	1	徳島県博物館建設記念学术奨励基金運用委員会	千葉繁昌記(大)	1	"
徳島県那賀郡古屋岩蔭遺蹟調査概報	1	"	千葉繁昌記	1	"
徳島県博物館紀要 第1集 その他1	2	徳島県博物館	加曾利貝塚	1	"
鐸、小道具目録 他2	3	市立函館博物館	泉地区の文化財他1	2	"
			少年非行の実態	1	琉球警察本部
			民俗資料調査報告書	1	鹿児島県明治百年記念事業事務局

書名	部数	寄贈者	書名	部数	寄贈者
那霸 1969	1	那霸市役所	事業概要 16.3 その他 1	2	市立名古屋科学館
慰靈塔案内	3	大同印刷工業㈱	松茂良興作略伝	1	松村興勝
古清水	1	中川伊作	天女橋修理工事報告書	2	琉球政府文化財保護委員会
MUSEUM 3.4.5.6月号	4	東京国立博物館	石川県の肖像画	1	石川県美術館
錢亀古錢と新資料展	1	市立函館博物館	越前のやきもの 他 1	2	"
那霸市史 第1巻の2	1	那霸市役所	沖縄歴史研究 8号	1	沖縄歴史研究会
私の日本地図(沖縄)	1	宮本常一	MUSEUM 7.8月号	1	東京国立博物館
教育財政調査報告書	1	文教局	図説鳥居龍蔵伝	1	鳥居博士顕彰会
東京国立博物館紀要 第5号	1	東京国立博物館	鳥居龍蔵博士の思ひ出	1	徳島県立鳥居記念博物館
石橋美術館々報 16.14	1	石橋美術館	徳之島郷土研究会報 第4号	1	徳之島郷土研究会
京の絵地図	1	京都国立博物館	野田市の指定文化財	1	野田市郷土博物館
京名所風俗図	1	"	もんぶしよう	1	文教局
沖縄県史 第2巻 各論編1	1	琉球政府	瀬底島その概況と瀬底ウスターについて	1	琉球文学研究クラブ
おきなわの民具	1	琉球大学美術工芸科	AREA AND CULTURAL ORIENTATION TO OKINAWA	1	ELIZABETH STOCKTON
全国書画展覧作品集	1	国立歴史博物館	フォート	4	時事通信社
国立歴史博物館	1	"	郷土 第8号	1	沖縄学生文化協会
博物館学紀要 1968	1	国学院大学	喜如嘉の民俗	1	平良豊勝
博物館だより	2	神奈川県立博物館	博物館研究 第43巻 第3号	1	日本博物館協会
ムゼイオン 第16号 和漢、洋書増加目録 第7冊 他1	1	立教大学	ROBERT H. LOWIE MUSEUM OF ANTHROPOLOGY UNIVERSITY OF CALIFORNIA BERKELEY	1	
資料目録 考古編	2	琉球大学	衣生活 10月号	1	今津玲子
太陽 9月号	1	日本民俗資料館	カラー 沖縄	1	山と溪谷社
太宰府天満宮史料卷6 手をつなぐ本土 一沖縄青少年	1	太宰府天満宮	図書館学論文集 他 1	2	洪餘慶
南島考古 1970 16.1 京急油壺マリンパーク水族館年報	1	大城美椰子	文教時報 第20巻 第1号	2	文教局
日本の旅 14 友禅染 禅の書 博物館案内 史料館所蔵民族資料図版目録第3巻 精神衛生 2.3.4号	3	沖縄考古学会	スペイン美術展 市立旭川郷土博物館月報 2月~8月	1	朝日新聞社
記念誌 他2 沖縄要覧 沖縄民俗同好会報 16.11~15	各1	京急油壺マリンパーク	教育関係予算の解説	7	市立旭川郷土博物館
	3	文部省史料館	研究紀要 第2冊	1	文教局
	1	沖縄精神衛生協会	日本の民芸 通巻182号	1	大阪市立博物館
	3	"	古丹波	1	三宅忠一
	1	文教局	研究余滴 121~138号	18	球陽研究会
	5	沖縄民俗同好会	先史 6	1	駒沢大学考古学研究会
			日本美術年鑑 昭和44年版	1	美術研究所

月別消費電力量及び水道使用量

月	電気 KWH	水道 m ³
1	6,350	21
2	6,230	86
3	6,580	48
4	6,400	37
5	5,510	43
6	10,140	35
7	12,020	57
8	14,100	96
9	14,010	74
10	12,050	48
11	10,250	73
12	6,610	104

博物館主催行事について

民具特別展

期間：1970年1月21日
～6月30日

場所：第2陳列室

当館所蔵の民具約250点を長期陳列した。民具展は3年来の、しかも長期陳列ははじめてとあって、人気が集中した。民具の数は少ないが、国頭から与那国、波照間までの広範囲にわたっている点特徴としてあげられる。今では珍しい木製砂糖車や松の木をくりぬいたサバニなど、また衣類でも本土のサシコに似たフクター、きれ地を織ったウンジョウなど貴重な資料を出した。



展示品の一部

出品内容

- <衣> フクター、ウンジョウ、ワラグツ、みの（シュロ、スゲ）、若狭町足駄など。
- <食> カマンタ（なべ蓋）、アツカイ（貝杓子）、プラヤクン（ほら貝やかん）、ペラグ（瓢製柄杓）、豆腐箱、石臼、クバこしき、ソブル（クバつるべ）、フタバーキ、サギゾーキ、平バーキ、フジョウ、火繩など。
- <住> アシンマ、ニクブク（敷物）、ほうき、自在かぎ、たばこ盆、マークなど。
- <農業> マーガ、ウザイ、ミングエー、キーパイ、ウズンビーラ、ヘラ、ティビク、アサンザニ、せんば、クルマ棒、麦すり石、ウーシ（臼）、アジン（杵）、シリウーシ（摺臼）、ミーゾーキーもみかき、たわら、木製砂糖車、スル板など。
- <漁業> ュートゥイ、アンディル、トウジャ、ウジム、サディ、ウーキカガン、目カガン、タカヤーマ、海フジョウ、アグイ、アギタなど。
- <機業> 高機、地機、ウンジョーキ、ヤーマ（糸車）、ティーシー、わたくりなど。
- <職人・加工用具> 瓦製作具一式、ハタムン（むしろ織り用）、薔薇割り、もっこヤーマ、ンムクジシリ一、車イリなど。
- <運搬用具> 担い棒、ガンシナ（輪）、荷鞍、背負い用ティル、ピャーギなど。
- <畜産用具> おもがい、ト一一、口くくりなど。
- <交易用具> ナカムイ、斗搔など。

やきもの資料展

— ヤチムン会共催による —

期日 1970年7月3日～8月30日

会場 ロビーならびに第二陳列室

この「やきもの資料展」は出品点数や種類の豊富な点からみて規模が大きくなりまでない画期的な催し物であった。会期は約2ヶ月にわたりその間、焼き物研究家や愛好家、陶工、一般の人々を動員し文字通りそれ等観覧者をやきものの世界に誘い、大好評を博した。出品物は総てヤチムン会員所蔵の陶磁器で会員が沖縄各地を精力的に駆け廻り収集したものがばかりであり、沖縄の陶器はもとより、

外国の陶磁器に到るまで500余点が展示された。沖縄の陶器では上焼、荒焼を含めその代表的なものには古我知焼、知花焼、喜名焼、壺屋焼、八重山焼、その他があげられ更に九州の焼物や安南、タイルソン、福州あたりの陶磁器など内容は多種多様であった。

大きさも、高さわずかに3センチにも足りないアンダチブから1メートルに近い大甕類に到つております。展示は第1会場のロビーでは主として上焼、第2会場の第二陳列室には荒焼を中心まとめてあつた。なかでも、第2会場の荒焼の壺や甕はこの資料展の主軸をなすものだけあって実に壯觀であった。

この荒焼の壺や甕類は昔から沖縄の人々の生活に広く使われており、したがつてそれが生活に占める役割は實に大きいものがある。その点に注目すれば、これらの焼き物と生活との密接な結びつきの中から沖縄のすばらしい伝統文化は生まれ、発達してきたと言えるのではなかろうか。ところが、戦前と戦後の生活様式が今日では一変してこれらの焼き物、なかでも荒焼は日常生活から締め出され、無用の長物として捨て去られる運命をたどつている。現在の壺屋では殆んどこの種の壺や甕は作られない。そこでいきおいその技術を継ぐ人も少なくなり近い将来忘れ去られ滅んで



展示品の一部



展示品の一部

いく危機に直面していることは憂慮に耐えない。

今回の資料展では、それらの古い大甕類を一堂に集め、比較研究するなかでみんながそのよさを再認識し、大切に保存しようとする気運を盛り上げる目的もあった。その点此度の資料展は所期の目的を立派に達成したと評価してよいのではなかろうか。なお、共催したヤチムン会は沖縄の文化遺産を守り広く民芸を愛好し収集と研究活動を通して沖縄の文化運動に積極的に参加する若い教師、画家、その他20余名によって組織された団体であることを附け加えておこう。



展示品の一部

出 品 内 容

沖縄の部

1. 上 燒 マカイ 皿、花活、アンダガーミ、アンダチブ、対瓶、徳利、カラカラ、茶壺、アンビン、シビン、ユシビン、その他
2. 荒 燒 酒甕類、水甕類、味噌甕類、徳利、摺り鉢、アンビン、マス、藍甕、手培り、その他
3. 土 器 パナリ焼、壺

外国の部

シャム南蛮甕、ルソン南蛮壺、南支那系壺、青磁碗、薩摩焼、伊万里染付（碗・徳利）その他

簡引びんがた展

期間：1970年9月22日～10月16日

場所：第二陳列室

びんがたを染める技法には型紙を用いて染める「型染」と、型紙なしで直接糊おきをして染めあげる「簡引」の二通りの技法がある。前者は主として着物地を染める時に用い、後者は風呂敷や舞台幕、布団生地、その他垂幕など比較的大きなものを染める場合に用いられる技法である。

びんがた染の特徴は型染にあることはいうまでもないが、簡引にはまた、型染にみられない、のびのびとした自由な線の美しさと動きがみられる。 展示品の一部

今回は、この簡引によつて染められた当館所蔵の風呂敷29枚、舞台幕2帳、垂幕1帳、布団生地1枚の計33点を、はじめて一堂に集め展示した。個別に鑑賞する場合とは、また違つた美しさがあらわれ、改めてそのよさが認識された。



出 品 目 錄

番号	名 称	寸 法	番号	名 称	寸 法
1	松竹梅鶴亀模様紅型舞台幕	200×670	18	梅に三ツ巴紋紅型風呂敷	150×146
2	"	185×465	19	松竹梅模様紅型風呂敷	130×140
3	牡丹獅子紅型垂幕	96×250	20	松竹梅模様に一ツ巴の字紋 "	87×96
4	松竹梅鶴亀模様紅型布団生地	167×205	21	牡丹模様紅型風呂敷	100×94
5	牡丹模様紅型風呂敷	110×108	22	松竹梅模様紅型風呂敷	111×112
6	菖蒲模様紅型風呂敷	100×100	23	菊模様紅型風呂敷	86×90
7	浅地牡丹模様紅型風呂敷	95×105	24	藍型松竹梅模様紅型風呂敷	45×114
8	松竹梅模様紅型風呂敷	100×100	25	菊模様紅型風呂敷	156×154
9	牡丹模様紅型風呂敷	170×160	26	菖蒲模様紅型風呂敷	151×140
10	松竹梅模様紅型風呂敷	80×80	27	藍型松竹梅鶴亀紅型風呂敷	154×142
11	" "	83×77	28	牡丹模様紅型風呂敷	192×200
12	牡丹に王家々紋入紅型風呂敷	115×106	29	藍型牡丹模様紅型風呂敷	89×80
13	牡丹に扇組み合せ紋 "	150×146	30	松竹梅鶴亀模様紅型風呂敷	76×74
14	桔梗模様紅型風呂敷	115×117	31	牡丹に三ツ巴模様紅型風呂敷	101×100
15	松竹梅模様紅型風呂敷	110×105	32	松竹梅模様紅型風呂敷	97×778
16	松竹梅鶴亀模様紅型風呂敷	110×106	33	藍型松竹梅模様紅型風呂敷	82×97
17	松竹梅模様紅型風呂敷	94×100			

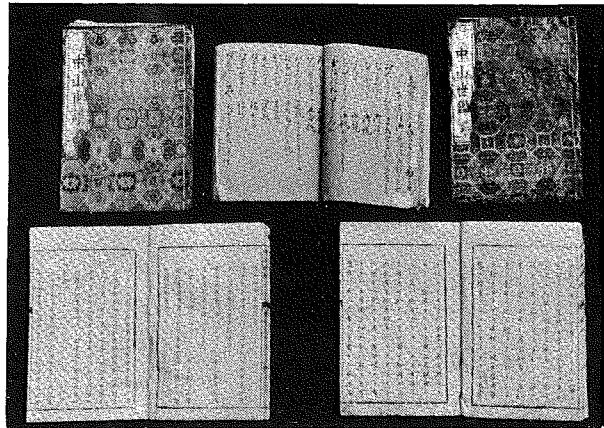
指 定 文 化 財 展

文化財保護強調週間行事

期間 1970年11月1日～11月7日

場所 第一陳列室、第二陳列室

文化財保護強調週間行事として毎年「文化の日」をはさんで行なわれるもので当館所蔵品をはじめ、日頃あまり参観することのできない民間所有の文化財を県民に開放する展示会である。この期間中は平常より多くの参観者が来館し、その数は4,809人にのぼり盛況であった。一方、第二陳列室では建造物を中心とする文化財写真展も行なわれた。



展示品の一部

期間中、講堂においては琉球文化財保護委員会所蔵の映画は午前、午後各一回ずつ公開された。

出 品 目 錄

名 称	種 别	所有者名 (敬称略)	名 称	種 别	所有者名 (敬称略)
木彫円覚寺白象並びに趣意書木札	特別重要文化財	博物館	三味線「久場春殿型」 " " 「久場春殿型」	重 要 文 化 財 " "	新崎 盛亀 伊波 義雄
世持橋勾欄羽目	"	"	" " 「南風原型」	" "	金城 幸輝
玉陵石彫獅子	重 要 文 化 財	"	" " 「久葉の骨型」	" "	"
目了筆(白沢之図)	"	米須 清嘉	" " 「与那型」	重 要 文 化 財	久保田清栄
三味線「翁長開鐘」	特別重要文化財	野原 昌彦	田 名 文 書	特別重要文化財	田名 真章
三味線「志多伯開鐘」	"	金城 紀光	評定所格護定本おもろさ	"	博物館
三味線「湧川開鐘」	"	高宮城弘陽	うし	"	"
旧首里城正殿前梵鐘	"	博物館	評定所格護定本混効験集	"	"
聞得大君御殿雲竜黄金簪	重 要 文 化 財	"	評定所格護定本中山世鑑	重 要 文 化 財	"
黒塗螺鈿遊絵大文庫	"	"	評定所格護定本中山世譜	"	"
黒塗堆錦山水絵大文庫	"	"	宮古島下地の首里大屋子	辞令書	"
黒塗螺鈿雲竜文内金箔蓋付椀	"	"	への辞令書	"	
三味線「江戸与那」	"	久田 友栄	屋嘉比朝寄の作「工工四」(写)	"	琉大図書館
" " 「南風原型」	"	奥間 盛正	蔡 温 の 書	"	長田 紀秀
" " 「知念大工型」	"				

職 員 の 活 動 状 況

- 1970年3月1日～3月9日 勝連城調査（玉城盛勝）（依頼出張）
- 1970年3月12日 具志川市における南蛮がめの調査及び収集、並びにアメリカ陸軍（ズケラン）に貸出し中の当館資料の収納（大城精徳、宮城篤正）
- 1970年3月16日～23日 勝連城調査（玉城盛勝）（依頼出張）
- 1970年3月18日～4月4日 東京都における沖縄展へ出品する当館所蔵品の管理（上江洲均）（依頼出張）
- 1970年3月26日～31日 勝連城調査（玉城盛勝）（依頼出張）
- 1970年4月3日～6日 勝連城調査（玉城盛勝）（依頼出張）
- 1970年4月7日～18日 神奈川県における沖縄展へ出品する当館所蔵品の管理（宮城篤正）（依頼出張）
- 1970年5月6日～12日 八重山地方考古資料調査（玉城盛勝）
- 1970年5月15日～16日 大宜味村でさば焼古窯資料収集（宮城篤正）
- 1970年5月19日～29日 大阪市における沖縄展へ出品する当館所蔵品の管理（外間正幸）（依頼出張）
- 1970年6月27日～29日 喜如嘉、津堅、伊計の民具調査（上江洲均）（依頼出張）
- 1970年7月21日～27日 八重山地方の民具調査（上江洲均、黒島惇）（依頼出張）
- 1970年10月3日 港川へ造園のための石材の交渉（大城精徳）
- 1970年10月10日～11日 平安座島の厨子がめ調査及び離島（浜比嘉、津堅、伊計、宮城島）の視察（外間正幸）
- 1970年11月11日～12日 大里村、玉城村、具志頭村の石垣調査（大城精徳）（依頼出張）
- 1970年11月20日～26日 伊平屋、伊是名の民俗資料調査（上江洲均）（依頼調査）

- 1970年12月9日 中部で私設民芸館視察（上江洲均、宮城篤正）
- 1970年12月21日～27日 沖縄洪積世人類遺跡調査委員会の南部（港川）での遺跡調査に参加（玉城盛勝）（依頼出張）

研究及び調査報告

宮古讒書事件の流罪者たち

一前島尻与人波平恵教とその娘メガを中心に一

.....上江洲 均 28

壺川窯出土陶片調査略述 宮城篤正 36

宮古讒書事件の流罪者たち

——前島尻与人波平恵教とその娘メガを中心に——

上 江 洲 均

(1)

1860年におきた宮古の讒書事件が、近代史の上でいかなる意味をもつのか、波平恵教の思想と行動をどうとらえればよいか、門外漢の私には考え及ばないことである。したがって、ここではいくらか残されている記録と伝承をもとに、波平恵教の事件とその娘メガについてふれてみたい。

久米島でまだ学校へ通っていたころ、流罪者について古老の話を聞いたことがある。話の概略はこうである。

「宮古島から母親に子供たち合わせて4～5名で流されて来たが、どのようなきさつがあつてか男たちは西海岸アナガー（地名）の岩の下で足車（足かせ）をはめ、番人をつけておかれた。彼らは毎日飢えて岩の下に坐っていて、雨が降った時、禪をはずしては庇の外へ投げ、雨水をしめして絞り飲みしていた。人のよい番人だとこっそりと食事や飲み水を分け与える者もいたが、悪い番人になると見さかいもなく打擲した。……ところが、ある嵐の日、大波がやってきて男たちを洗い去ってしまった。その後、母と娘は物乞いをして廻ることもあった。娘の名はミガ一といつた。」

人々の彼ら悲劇の関係者に寄せる同情が、いつまでもその事を記憶させることとなつたと思うが、私は妙にこの事件の流罪者メガやその二人の兄のことが幼心に焼きついて忘れることができないでいた。しかし、その後十余年もへてこの話も古い話になつてしまつていた。

ところが、一昨年の夏久米島の旧家で、1862から1863年に至る流罪者を控えた文書を発見し、頁をめくっているうち、その最後の方に「此下五人久米島百姓ニ召加」というのがあり、宮古からの流罪人で、娘の名が「めが」となつてゐる点に疑問をもち調べているうち、以前の話を思いおこしたのである。同時に「宮古史伝」（慶世村恒任著）や「宮古庶民史」（稻村賢敷著）に詳しく述べられていることと、この流罪者が同一人であることに気がついた。「流罪者控」（表紙がないが便宜上こう呼んでおく）にある「前島尻与人波平」が讒書事件の「前島尻与人波平恵教」であることは、全く疑う余地もないことである。またこの事件については、「琉球の歴史下」（仲原善忠著）にも述べられている。

ここで久米島に残る話、宮古島の子孫に伝わる話、「流罪者控」をもとに話をすすめることになるが、「讒書事件」がいかなるものかを前記三書からながめてみることにする。さらに「球陽」卷22ノ乙、尚泰王14年（1861年）の条に、「獄延大屋子毛長仁比屋根親雲上安達ヲ遣ハシ宮古ニ抵ツテ犯人ヲ審問セシム」、「東順法与世山親方政輔、翁世傑真境名親雲上盛昇ニ飭シ宮古島ニ在テ犯人ヲ審問スル事務ヲ点検セシム」（桑江克英訳註本による）という記事があり、この事件について記しているので併せて参考にしたいと思う。

讒書事件は、宮古で咸豐10年（1860年）、薩摩商人に密托した密告書に端を発したもので、この訴状は送り先の薩摩藩には届かず、首里王府の手中に入るに至って、玉府はこれを叛逆行為となし犯人検挙を宮古島在番に厳命して来た。

讒書事件の内容といふのは、つぎのとおりであった。（「宮古史伝」による）

一、琉球は、小国にして大国の間に介在し、諸政行ひ難く、常に財政窮乏し、上はこれ下を恵まず下はこれ貢納に急にして自ら困憊す。治績頗に挙らず、庶民政に安んずる能はず、偏に大国に販趨付庸の急なるを覚ふる也。

二、当島は往古自立の政を行ひ来りしものにて、与那覇頭中山に服属の途を講ぜしより其の属領となりしも、用語と云ひ先租の由來と云い寧ろ大和に近きものなれば、下々の者皆大和を以て親國と云ひ、これに販するを喜ばずと云う者あらざる也。

三、希くは此の素懷を大和親國の高官に致し、談合折衝の宜しきを得、悪政に困弊する島民を公道の下に救ひ給はゞ、衆庶靡然として聖天の徳化に服すべきや必せり、云々。

要するに「人民は一日も安らかな日をおくることができない。ねがわくば一日も早く日本と一つにして、あわれな人民をすくつもらいたい」（仲原善忠著『琉球の歴史』下）ということである。

島中の頭以下の諸役人諸士中、文筆ある者二十数名を挙げ、朝夕言語に絶する拷問をかけた。審問の結果、再度の落書（1858年にもあった）共に前任島尻与人波平が主謀となり、前任多良間首里大屋子、前任与那覇目差、前任池間目差、亡洲鎌与人の三男平良仁屋等がこれに共謀したことが判明した。

「宮古史伝」ではこの事件を『落書事件』とし、「宮古庶民史」では『讒書事件』としているが、「球陽」では、『落書』と『さん書』をはつきり区別しているので、それに従いたい。曰く、「前任島尻与人が前任多良間首里大屋子、前任与那覇目差、前任池間目差、亡洲鎌与人ノ三男平良仁屋等ヲ勾引シ、相共ニ党ヲ結ビ上届午年落書ヲ武富旅館ニ投遞シ、去夏ニハ讒書ヲ監守館ニ寄遁ス。ソノ後既ニカノ両書ヲ將ツテ、頭目下地親雲上ニ遞給シテ之レヲ看セシメ、マタソノ情由ヲ將ツテ縦横目上地与人ニ説給シテ之レヲ聽シムルノ等語。隨ツテカノ下地上地兩人ニ詢フニ、ソノ云フ所ト毫モ齟齬ナキノ等由。冊ヲ具シテ報來ス。ソレ衆口一詞ニ因レバ則チ當ニ再ビ詰問ヲ行フコトナカルベシ」（桑江克英訳註本による）

伝承によれば、容疑のかかった役人の家には常に密偵がひそんでいた。波平の妻はこの有様を嘆き、「いったい誰がやったのでしょうか」といった。すると波平は平然と「おれたちがやらずば、誰がやってくれようか」と答えた。それを張りこんでいた密偵にさぐられ、検挙となつたという（多良間島の子孫に残る話）。あくまでも伝え話なので、全面的に信用はできないだろうが、疑心暗鬼の世になっていたことは確かである。

かくて主謀者波平惠教に対しては、3年の牢込めの上斬罪、共謀者に対してはいずれも慶良間島、渡名喜島等へ流刑を判決した。波平の妻子は久米島へ流刑に処することになった。

この事件は、その12年前の1848年に起つた「割重穀事件」や1855年の「多良間騒動」など大量の処罰者を出した事件とも関係が深いが、紙数のつごうもあり、それについて詳しくはふれられない

ただ、「割重穀」が吏道腐敗の政治、経済的破綻に端を発していることは容易に察せられる。折から西洋の黒船は近海に出没し、島民の心はすっかり動搖し、治に安んずることができず、ついにはひそかに琉球小王国の独立不可能を考える者も出た。ちなみに、割重穀とは宮古の上下の役人たちが、私腹をこやすために人頭税に割重みをして租税を賦課し、それが發覚した事件である。

以上は、「宮古史伝」や「宮古庶民史」の説くところであるが、この讒書事件で中山王府は当然のことながら驚愕し、彈圧するのに奔走したことであろう。1861年2月に宮古よりの報があつて10月に獄延大屋毛長仁（比屋根親雲上安達）、吳承業（与儀筑登之親雲上幸顕）、向重光（小橋川里之子親雲上朝昇）署任仮筆者向行仁（仲本里之子朝嗣）等に大筑1名、筑佐事3名をつけて遣わした。彼らは翌年の6月まで滞在している。

前島尻与人波平恵教は、生來聰明豪胆な者であったと言われる。加うるに一種の理想主義者であつたとも言えよう。文才あり、能書家であつたといわれ、例の訴状は筆蹟をかくすため足に筆をはさんで書いたということである。罪状が發覚し、いよいよ捕手が迫った時は、家族と盃をとり交わしたといい、判決があつて3年後に市中を馬上でひき廻され、南長間（地名）で首をはねられた時は、首斬人に頭を上げて、ここをと示すほどの豪胆さであつたと「庶民史」は述べている。

最期の日のもようを、多良間島の子孫には次のような伝え話が残っている。

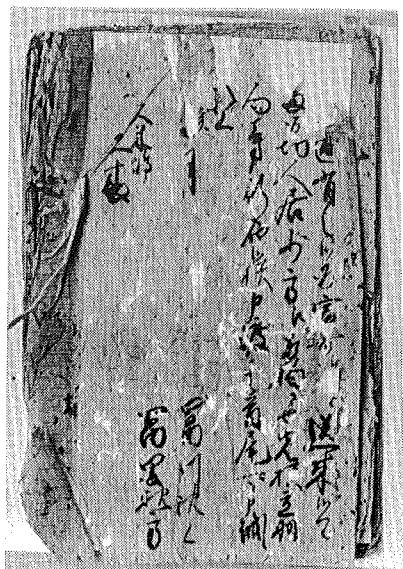
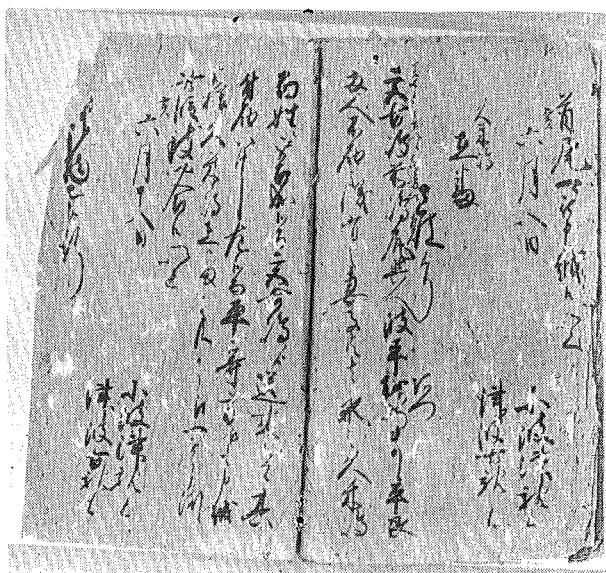
「波平は租税の穀類を入れる倉すなわちブンミヤーに入れておされた。いよいよ処刑の日には馬に後向きに乗せられ、市中をひき廻され、南長間の浜の砂に穴を掘って体を埋められた。面前には味噌塩、ごはん、おつゆが供えられた。宮古での空前の斬首を見ようと人々が集つた。波平の徳を惜しむ人々は彼の命乞いをした。しかし、波平はそれを制し、沖縄からやって来た首斬人をうながし『天が地になるぞ、地が天になるぞ』といつかは四民平等の時代の来ることを予言し、世を去つた。……彼の首ははねられたが、そのまま天に舞い上り、落ちて来なかつたという話である」

この事件について砂川明芳氏は、多良間騒動でウルカヌシェウと呼ばれる役人が指導者になっているという伝承があるが、これは落書事件の犯人波平恵教本人、あるいはこれと大きな関わりあいをもつ者であると考えると述べている。その理由は、①王府への直訴も効の少ないことを確認した者が（多良間騒動の直訴をいう）、薩摩に対する投書をなし、人民を窮状から救うために体制打破の計画をすることは当然の帰結だと考えられる。②直訴状の書き方と、ざん書状のしたため方が、どちらも手を用いないでなされたという方法において共通している。③多良間の伝承で、主謀者ウルカヌシェウは断罪されたとなっているが、宮古の歴史では断罪されたのは彼を除いてはいない。（「多良間騒動」（『歴史地理教育』）126, 1966, 11）

波平は、たしかに多良間に勤めたことがあったようだが、多良間騒動のころはどうだったか、はつきりしたことはわからない。彼はその数年前の「割重穀事件」に關係して免職になつたとも言われる。（「庶民史」）。もしそうだとすれば、多良間に渡つた時期をめぐつて二つのことが考えられる。一つは免職になる前、すなわち1848年以前ということ。もう一つは、割重穀事件で一旦免職になりながら、数年後すなわち1855年の多良間騒動までには復職し、多良間勤務をしていたという考え方である。しかし、その辺の事情については資料もなく、ようとして不明である。



流罪者に関する
文書



「流罪人控」は、芭蕉紙に書かれたもので、流罪関係12件を納めたものである。他の流罪人が前年戌年の「窃盜」や「焼酌の抜造」で4年ないし6年の刑になり、加えて「当月より閏月相込年々十二月之賦を次年數倍合云々」と一様にあるのに対し、年数はないかわりに「縁坐の罪科難遁」とあって、「宮古島より送来候ハゞ其付届いたし云々」旨と指示している。

亥七月十八日仲里間切より相届
 手形
 此下五人久米島百姓ニ召加
 宮古島前島尻与人波平
 男子当歳二十三
 具志川 兼城
 同人右同當歳十九
 右同 亀川
 同人女子当歳七
 右同 めが
 同人妻当歳四十九
 右同 かな
 阿つま故平良男子当歳十九
 仲里 砂川
 右者前島尻与人波平阿つま故平良謀判之悪行有之縁坐之罪科難遁ニ付右通申付候也
 亥六月八日

右通被仰付差渡候条其付届いたし首尾へく被申越候以上
 亥六月八日

久米島在番
 さばくり

亥七月廿八日仲里間切相届
 宮古島前島尻与人波平、あつま平良両人不届之儀有之、妻子共ハ永々久米島百姓ニ被召成
 候間、宮古島より送来候ハバ其付届いたし、左候て平等方へも申越候様久米島在番さばくりへ
 可被申渡候、此段致向合候以上。

亥六月十八日

小波津親雲上
 津波古親雲上
 御物奉行

右通有之候間、宮古島より送來候ハバ、両間切入居少方へ相持させ、先様立場向旁行届候様
申渡其首尾可申越候以上

亥七月

富川親雲上

富里 親方

久米島

在番

ここに出てくる「平良」というのは、共犯者「平良仁屋」のことであろう。流罪者の上の「具志川」「仲里」は配所を示している。これに「謀叛の悪行有之縁坐之罪科難遁に付」と述べているが、「球陽」にも「但シ讒書ヲ監守館ニ寄遁スルハ此レ叛逆ノ事ニ係ル、特ニ重罪本犯ノミナラズ、而シテ妻子兄弟祖孫ニ至ルマデ亦罪譴ヲ免レズ、誠ニ輕ラザルニ属ス、云々」（桑江克英訳註本による）と罪の重いことを強調している。

さて、刑が確定したのは、事件の翌年首里王府から審問吏を派遣して審問させた1861年10月以降1862年6月までの間であろう。それが、王府から久米島への文書が送付されたのが、「亥年」すなわち1863年6月であるから、事件のあつた年から3年後のことである。しかも文書から察するところ、宮古からはまだ流罪者は届けられていない。彼らが久米島へ渡つたのは、おそらくその翌年の1864年だったにちがいない。そう想像する一つの根拠は、娘メガの年令である。亥年に7才であるのが「宮古庶民史」によると、8才で流刑になつたとあることである。前記「流罪者控」には「妻子共は永々」とあるだけで、年限はないが、「宮古庶民史」によると、8才から18才までの10ヶ年間久米島に流刑になつたというから、母娘が久米島を去つたのはおそらく明治7年（1874年）ごろだつたのだろう。

ここで、この「流罪者控」の出所について簡単に述べると、それは上江洲家（石垣殿内）の分家筋にあたる家である。この家の初代の智昌と三代目の智憲は1820～1830年代にそれぞれ地頭代をつとめている。四代目の智清は安政4年（1857年）の生れで、たぶん「メガ」と同じ年かつこうであつたはずである。したがつて智清の手によるのではないことは容易に察せられる。

(4)

この流刑者についてだれか知っている人はいないものか、おぼろげなことでもいいから尋ねてみようというので、従兄を通じて久米島山里部落の仲村昌性氏（96才）に質問状を出してみた。氏はこれはあくまでも聞きおぼえのことだと前置きし、返事をよこしてくれた。それを記載してみることにする。

(1) 宮古から母子4～5名で流されて來たことがあつたか。

— 事実あつたようだ。

(2) もしあつたなら、母はカナ、娘はメガ（ミガー）といつたか。

— 名前については知らない。

(3) 全員で何名だったか。

—— 一家族で宮古から久米島へ流されて来る途中両親あるいは父親だけか)が病死したので、海へ落としたとのことである。残ったのは何名かよく知らない。

(4) 「アナガー」で足かせをかけられたのは男たちだけか。

—— その通りに聞いている。

(5) 女たちはその後どうなったか。

—— 宮古へ帰ったといわれる。娘の方は宮古で結婚したという話を聞いている。

(6) 彼らはその間どこに住んでどのように話していたか。

—— はじめは、宇山里小字玉那覇の後方、カラ畠といいう所にいたようだ。憶測だが、彼らがある村への非難をしたので、その村では立腹し、男2人を西海岸のアナガーで足かせかけたのだろうと思う。アナガーでの番人になったのは、主に仲地・山里出身の役人だったといわれている。母娘は、男たちがつれ去られて後は、仲地部落の西端、現在の新屋という屋敷(当時は林)に家を建てて細々と暮していたそらである。

仲村翁の久米島における伝え話のうち、両親か父親かが、途中で病死したという話は、明らかに誤りである。しかしながら、宮古で「大和世」を願つて処罰されたこと、娘が宮古へ帰つて結婚したということなどについては当を得ているといえそうである。ただ、今なお不明な点があるとすれば、久米島へ流されて来てから何ゆえに二人の息子は足かせをはめられたかということである。部落への非難とか農作物あらしをしたと見るむきもあるようだが、いずれも憶測の域を出ない。その仕置きは、間切での協議によるものか、あるいはそれ以上の役所からの指示なのか、資料が手もとにはないので判然としない。

(5)

つい最近、宮古へ渡つたついでに平良市役所の戸籍課をたずねてみた。「メガ」あるいは波平恵教の遺跡をつぐという波平昌永についても調べてみたかったからである。「庶民史」によると、その後の娘メガについては、帰島しても周囲が彼らを容れず、結婚の相手もなかったが、下地某氏が三度目の妻として彼女をむかえ、波平昌永他二女(実際には二男二女)を生んだ。この事件で嫁に出ていた波平の長女も離婚になつたところで、社会的制裁のきびしさを知るのであるが、その事実も調べてみたいと思った。

戸籍課職員の手をわざらわし、古い「除籍簿」から関連事象を拾うことができた。そしてそれらの事がきっかけとなつて、メガの孫にあたる方々にもお会いできたのは、大きな収穫だった。メガに関する、戸籍や孫にあたる方々の話を総合して記してみることにする。

メガ……安政4年(1857年)生まれ。これは亥年の七才から逆算して一致している。ところがどういういきさつからか、父は波平恵教ではなく、波平恵侶で、その二女になっており、母は不詳となっている。明治13年、数え年24才の時、砂川間切字下里の下地昌董の後妻になっている。「庶民史」にあるように三度目の妻かどうか確かでないが、後妻であることは、昌董の長男昌和から「継母」となっていることからもはつきりしている。メガは下地昌董との間に四男の昌永(明治22年生)を頭に二男二女を得ている。(「庶民史」の一男二女は誤りであろう)。

その後、明治31年昌永は波平マツの養嗣子として入籍している。そして大正3年には、昌永は母メガをはじめ妹カメ、弟昌保、末妹カナの4名を自分の所へ入家届出をし、入籍している。……これは、昌董が明治41年に死亡したので昌永をたよつたのであろうか。昌永と養母マツの間柄はどうなつていたのか、はつきりしたことはわからないが、ウップルムという波平家の由諸ある屋敷を嗣いでいるということから考えて、マツは恵教に近い縁続きの者だったにちがいない。

妹カメは嫁いだが、弟の昌保と末娘のカナはいったん結婚はしたというものの、どういりいきさつがあつてか、戸主昌永のもとで大正9年、昭和2年に相前後して死亡している。メガは昌保より1年前の大正8年に死亡している。教え年の63才であった。

メガの母カナは、いつたいどうなつたか。この人は戸籍には出てこない。あるいはメガの戸籍をつくつた時（廃藩置県後）はすでに死亡していたのだろうか。昌永もその妻カマドも昭和34年、41年にそれぞれ死亡している。今は、メガから孫にあたる昌一氏らの活躍している時代である。

話は前後するが、波平恵教は多良間島での任期中に、ヤマトウマ（日本人のように美しい女の意）という美しい娘とねんごろになり、娘カマドができた。そのカマドの孫たちが半ば伝説化した父祖恵教の当時のもようを伝え来たつている。それによると、恵教を「島尻の主」と一般に呼び、人々の敬愛を受けていた。つきのような歌もあり、庶民を愛したという恵教の人となりをほうふつさせる。

ユマタ（十字路）のちゅらさやウプンターラ・ユマタ
　　ユンチュ　ちゅ
　　与人の美らさや前島尻の主

波平恵教の再評価をめぐつては、かなりの論議があつた。「しかし、彼らのねがいは、廿年後に実現せられ、波平の名は宮古の歴史の上にかがやいています」（仲原善忠『琉球の歴史下』55頁）との見方は、恵教とその妻子が受けた苦難に対する一つの救いであり、誇張だとは思われない。

ところが、いわゆる「大和世」になるまでの20年間は、この一家にとつては激動の20年であり、士族としての誇りをもつといまもなければ、恵教の思想や行動について判断することさえできなかつたのではないか。そして社会的制裁は、実際には廃藩置県後もつづいたことであろう。

メガは性質おとなしく誰にでも親切であったと彼女を知る人々は語っているそうである。久米島において、土地の人々とのつき合いもよく親切にしたおかげで早く帰れたという話も残っているそうである。物心ついた時から、ひたすらに堪え忍ぶことを強いられたメガにとつては当然だと思うが、この事件のことについてふれたくない心情が濃厚で、それは子の時代まで続いたようである。親から子へと他人をはばかりながら伝え来つた話もあつただろうが、久米島での生活のもようもこれ以上知ることはできない。

内気なメガをいつそう臆病にしたのには他にも理由があつた。それは「ことば」の悩みであつた。幼年時代に久米島へ渡つたメガは、久米島の生活が身につき、十年後に宮古へ帰つた時は、ことばが通じなくなつており、それが周囲の人々との意志疎通にかなりの障害になつたようである。しかしそれより大きなショッキングな事件は、メガが宮古へ帰つて間もない明治12年に起つた有名な「サンシー事件」である。島人のいわゆる保守性が惹きおこした事件で前に苦い体験をもつメガにとつてはそれこそ生きた心地もしなかつたにちがいないと思う。

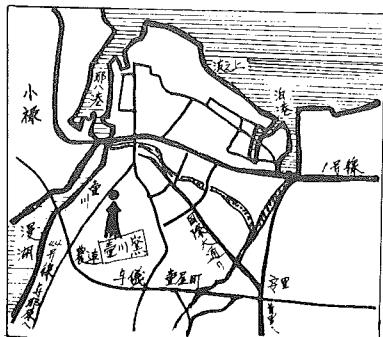
○

資料を提供して下さつた久米島の仲村昌性氏、ならびに宮古出身の波平昌一、比嘉トキ、比嘉ノブの三氏に紙面をもつて感謝の意を表します。

壺川窯出土陶片調査略述

宮城篤正

1. 名称、壺川窯出土陶片
2. 場所、那覇市壺川240番地
3. 地主、上原信一氏(38才)
4. 発見者、平良専明氏(ヤチムン会員)
5. 発見年月日 1970年6月3日



壺川略図

壺川窯跡の陶片が多量に発見され、窯跡の位置、技法、そこで焼かれた製品等がほぼ明らかにされた。場所は那覇から与那原へ通ずる44号線ぞいの壺川240番地の建築工事現場である。

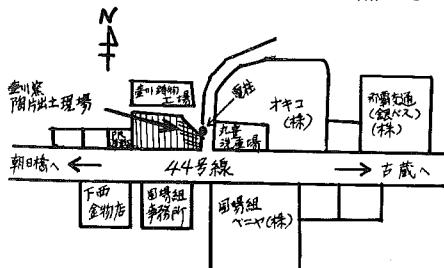
発見者はヤチムン会員の平良専明氏で、彼の話からそのいきさつを簡単に述べると、発見する3日前に用事で現場を通りかかった際、電信柱を立てるための工事穴から堀り出された土の中に重なった碗や無数の陶片を見つけた。その後、同氏は友人と二人でその附近を注意して調べてた。幸いわいにもその隣接地はアパート建築のため、整地を終え、コンクリートの柱穴を掘る作業が始まっていた。その柱穴の断面から陶片がたくさん堆積された層を確認し、今回の発見となつた。

当時(1970年6月3日)当館と琉球陶磁研究会の共催で那覇商港内にある御物城の青磁破片の表面採集を行なっており、その日(6月3日)は第2回目の採集に出掛けようとしている矢先に那覇商業高等学校教諭の普天間敏氏から電話連絡があり、急遽予定を変更して壺川に駆けつけた。当館からは大城主事、上江洲主事、筆者の3人が参加した。

現場には5、6人のヤチムン会員が既に集まつておらず地主の上原氏や重機の運転手に現場調査と陶片採集をする間、工事を一時中止して貰うため話し合っていた。当館とヤチムン会の共同調査申し出に對して、地主の上原氏も快諾されたので早速調査にとりかかつた。

まず、現場は一見して附近に散乱した無数の陶片と柱穴の断面にのぞく堆積層からこの近くに壺川窯があつたことはほぼ間違いないことを確認した。そこで文化財保護委員会に電話連絡する一方、両新聞社へも知らせておいた。間もなく文化財保護委員会の多和田指導官と知念調査官、両新聞社の記者が現場にかけつけた。現場の状況を写真におさめ、簡単な見取図を書き、陶片を段ボール箱の6箱分を採集してひきあげた。

以上が壺川窯跡の陶片発見までのいきさつと現場調査のあらましであるが、アパート建築中のコンクリート柱穴を掘る作業現場で発見され、しかも陶片が最も多く堆積されているとみられる場所には工事のための仮小屋が建ち、当時の状態では時間をかけての発掘調査は出来なかつた。いずれ工事が完了し、その仮小屋が撤去された時点で地主の了解を得て本格的な調査を行なう必要がある。その調



壺川窯附近見取図

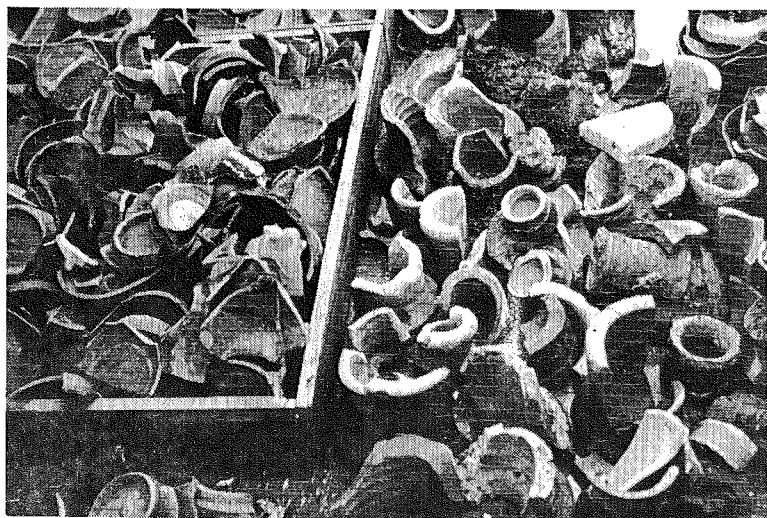
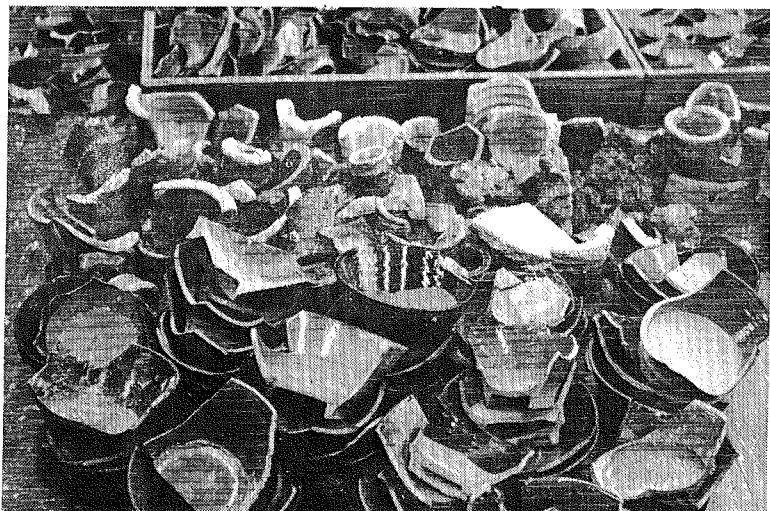
査結果については詳細にわたる調査報告書が作成されなければならないと考えている。

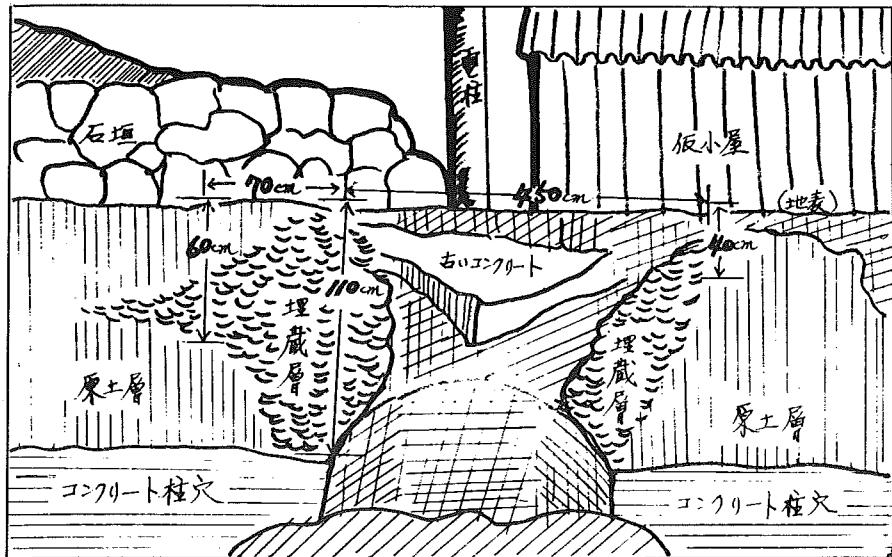
したがつて、今回は取り敢えず壺川窯跡の陶片が発見されたいきさつと採集した陶片をごく簡単に分類考察し、紹介する程度にとどめておいた

最後に地主の上原氏とヤチムン会諸氏の協力を得たことを記し、感謝の意を表します。

(写真紹介1)

— 出土品の一部 —





陶片出土状態

考 察

本来ならば発掘調査が行なわれた段階で考察されなければならないと考えている。そこでまず断つておきたいことは工事現場から採集した陶片類をもとに2、3注目すべき点をあげ、若干私見等をさしはさんで問題を提起し、今後の研究課題にしたい。

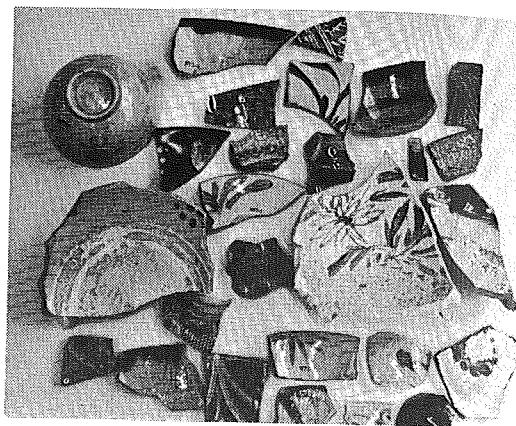
今回発見された壺川窯跡の陶片は湧田焼と先輩諸氏は見ておられるようである。文献によると湧田窯は尚寧王（1589～1620）の時、尚豊に命じて薩摩の島津公に懇願して朝鮮陶工張獻功一六、一官、三官を招聘し、那覇の湧田村に窯を開らかせ、その技術を伝えさせたとなっている。それは万暦44年（1616）の出来事であり、今から355年前にさかのぼる。（注1）

壺川窯はあるほどこれまでいわれている学説やその手法、地理的条件等からみて湧田窯に結びつけて考えるのが普通であるが、筆者は壺川窯をストレートに湧田窯に結びつけるにはまだ多くの疑問が残り、その点今後の研究すべき課題だと考えている。

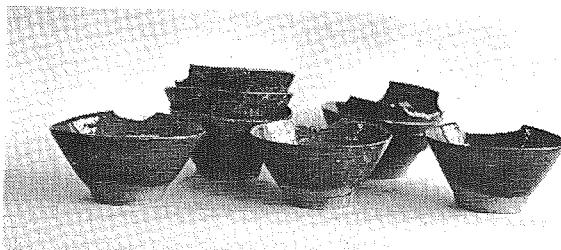
壺川窯は一説には、1743年（今から228年前）用啓基仲村渠致元によって築かれた窯であり、それがおよそ明治の中頃まで焼かれていたといわれる。（注2）しかし発見された壺川窯が致元の開窯になるかどうか、或いはその他の窯であるかも知れないので、その点確かなことは言えない。いずれにしても壺川窯の流れを汲む窯であることには間違ひなかろう。少々長くなるが、ここで仲村渠致元の業績について若干ふれておきたい。

致元は1724年、八重山に渡りそこで4年間、壺の焼き方をはじめ、陶法について指導して帰り、その2年後つまり1729年、白焼物を製作している。この白焼物についてはあとでふれることにしてこの年にはまた瓦窯から壺窯に改良したことも見逃がせない。1730年、致元35才の時、王命により薩摩の堅野窯や苗代川で朝鮮式薩摩陶法を学んで帰り、琉球陶芸に一段と精彩を加えた。具体的には、これまであった窯に薩摩窯を参考に改造し、更に窯の内部構造等にも工夫をこらすなど陶器が立派に焼き上るようになる一方いろいろな形の陶器をたくさん作っている。そこで彼は数々の業績により1752年、尚穆王から新家譜を下賜され、士族に取り立てられたのである。

(写真紹介2)



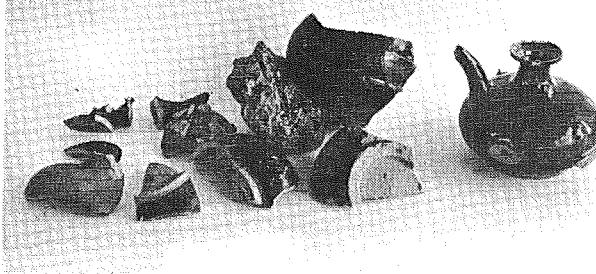
染付釣彫の一例



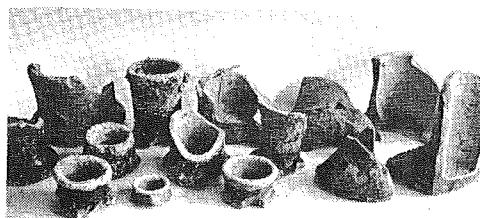
灰釉碗



白色茶碗他



カラカラ



窯道具の一部

その覚書の文中に「……且古波蔵村山野の内に控仕立て手舟を以て、白土薪木等を積み焼出候故……」（傍点筆者）（注3）とあり、この事実をもって前述の壺川窯の開窯とみなす説がある。更に当時、舟で陶土やマキを運搬していたこともわかる。従来、古い窯場の多くは近くに良質の土のとれることが絶対条件になっているが、壺川の場合はその条件にあてはまらず今の所、ばく然として、なにかそのあたりからも問題点が引き出せそうな気もする。しかし、壺屋の場合を考えてみると、荒焼に適する土は豊富にとれたが、上焼の土は各地から舟で運搬した事実があり、壺川や壺屋など上焼の土に限定してみれば同一条件である。なお、発見された壺川窯の陶片はすべて環元炎で焼かれたものである

さて、第一表を見ると、壺川窯は主に碗類を焼いていた窯であったということがはつきりわかる。なかでも、数字の示す通り灰釉の碗が圧倒的に多いことから、当時この種の碗が相当数作られ、使用されたと考えてよい。現在、宮古、八重山地方からこの種の碗は多く発見されている。

この碗に使われている手法はフィガキーと称され、きわめて古い手法といわれている。このフィガキーの手法と灰釉は、古我知焼碗にも多くみられる関係上、これまでよく比較されてきた。ところが古い壺屋でもこの手法が行なわれていたことが分っており、一概にこの点だけを取り上げて論ずることは危険ではなかろうか。つまり、壺川窯でも、湧田窯、壺屋窯、古我知窯でもフィガキーの手法は行なわれていたのである。この手法は時代が降るとハジムンと呼ばれている。「蛇の目」の手法に変わるが、面白いことには壺川窯の陶片を見た場合、フィガキーの手法とハジムン（蛇の目）の手法が同時に行なわれていることである。その点から考えると、いきなり「湧田焼きである」と断定するにはあまりにも性急な感がする。

なお、白土化粧を一切施されていないこの灰釉碗に対して、白土化粧を施した碗類も他にいくつか見受けられる。

更に興味をそそるものに、一見磁器に見間違う程の白色の碗と茶碗がある。これは前に致元の業績のなかで白焼物を製作云々とあったが、多分、この種類を指すものと思う。一方、柳宗悦が「琉球の陶器」一現在の壺屋とその仕事一の中で「壺屋には磁器はなく、陶器のみであるが、昔は半磁器と呼んでいいような味のいい白の無地のものを作った。」（傍点筆者）と述べており、この場合も同様、白焼物を指すと考えてよいのではなかろうか。

名護市喜瀬の白土が、いつ頃、発見され、採掘されたかについては、はつきりしないが、平田典通（1641～1713）が各地の土質など詳しく調査して歩いており、おそらくその頃に発見されたのではないかと推察することが出来る。そう考えるならば、壺川窯にそこから白土を舟で運搬していただろうという事は十分予想されることである。

ただ、残念なことには、現在、この白色碗の土質が果して喜瀬の白土で作られ、焼かれたものであるかどうか、この点、化学的なデーターがないので断言することは出来ない。いえることは、茶碗の内側に窯壁と同一の釉薬が附着しており、他にかさね焼きのあとがあることなどから、壺川窯で焼かれたことは確実である。

次に注目すべき点といえば、碗と急須の破片に釘彫り三島の手法が施さされていることであろう。破片からみる限りにおいては、模様や技術はなかなか立派なものである。

採集した陶片を整理して気づくことはかなり古い破片があるかと思うと、また新しいものがあること等から、この壺川窯はかなり長い年月にわたって使用された窯であるように思われる。

なお、表を作成する段階で①口縁部、胴部、底部まであるものを一個体と数える。②重ね焼きで接着した場合、その実数をあげ、カッコ内はそれ等を一個と数えた数字を示す。③胴部と底部がくつついている場合は底部に入れて数える。等に統一した。更に、破片から器物の名称があいまいなもの分からぬるものや、明らかに他からの混入したもの、不明陶片など一括して第五表にその実数を上げておいた。

(注1)「琉球国由来記」(卷二)を参考にした。「沖縄一千年史」には天和3年とあり、それは万歴45年にあたり一年のずれがある。

(注2)鎌倉芳太郎氏「琉球陶磁工伝統表」による。

(注3)比嘉景常氏「琉球焼物考」參取

(第一表)

A. 碗

釉薬 分類	灰釉	白色	飴釉	内・白土化粧 外・鉄 釉	内・白土化粧 外・飴 釉	内灰釉 外飴釉	内灰釉 外鉄釉	鉄釉	黒釉	内灰釉 外黒釉	内無釉 外黒釉
口縁部	362(288)	1	1	0	13	7	1	3	2	0	0
胴 部	144(138)	5	3	0	0	1	0	0	0	0	0
底 部	331(322)	1	0	0	17	2	0	1	2	2	0
個 体	90(82)	1	1	0	7	2	0	1	0	0	0
合 計	927(830)	8	5	0	37	12	1	5	4	2	0
備 考		個体は 釦影三 萬手			口縁部に飴 釉がかかっ ている。染 付が施され ている。	碗の内 側に飴 釉の線 がはい っている。					

B. 茶 碗

口縁部	0	6(5)	0	7(5)	7(6)	0	0	0	0	0	0
胴 部	0	2	0	1	2	0	0	0	0	0	0
底 部	0	2	0	2	1	0	0	0	0	0	1
個 体	0	5	1	3	1	0	0	0	0	0	0
合 計	0	15(14)	1	13(11)	11(10)	0	0	0	0	0	1
備 考		口縁部 に鉄釉 のかか つてい るもの あり。									

C. 皿

口縁部	0	0	3	8	0	0	0	0	0	0	0
胴 部	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0
底 部	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
個 体	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0
合 計	0	0	7	11	0	0	0	0	0	0	0
備 考				内ひとつは 具須染付あ り。							

(第二表)

カラカラ

分類	釉薬	鉄釉	白土化粧	飴釉	黒釉
口縁部	1	1	0	0	0
注口	0	0	2	0	0
胴部	0	0	2	3	0
底部	0	0	2	0	0
完形品	0	0	1	0	0
合計	0	0	7	3	
備考					

花 活

口縁部	0	0	0	0
胴部	0	0	0	0
底部	0	0	2	0
完形品	0	0	0	0
合計	0	0	2	0
備考			1個は窯壁 の破片に附着している。	

火 取

口縁部	0	0	2	0
胴部	0	0	0	0
底部	0	0	1	0
完形品	0	0	0	0
合計	0	0	3	0
備考			膨り込み	

(第三表)

ワシブー

釉薬分類	内・白土化粧 外・飴釉	白色	灰釉	飴釉	内・灰釉 外・飴釉	内・白土化粧 外・黒釉	黒釉
口縁部	1	1	6	1	0	0	0
胴 部	1	0	0	0	0	2	0
底 部	5	1	2	0	2	0	0
完形品	0	0	0	0	0	0	0
合 計	7	2	8	1	2	2	0
備 考	底部に染付 あり	口縁部に染付 あり				染付	

急 須

口縁部	0	2	0	1	0	0	1
胴 部	0	0	0	1	0	0	1
底 部	0	0	0	2	0	0	2
完形部	0	0	0	0	0	0	0
合 計	0	2	0	4	0	0	4
備 考		口縁部に 印花文釦 彫り三島 の手法あり					

対 瓶

口縁部	0	0	0	0	0	0	1
胴 部	0	0	0	0	0	0	0
底 部	0	0	0	0	0	0	0
完形品	0	0	0	0	0	0	0
合 計	0	0	0	0	0	0	1
備 考							

(第四表) 窯道具
トチ、カラマー、その他

分類	大きさ	大	中	小
完形品		0	1	10(8)
破片		48	62	34
合計		48	63	44(42)
備考				完形品で碗に附着したものの2個あり

サヤ、タナイタ

完形品	0	0	0
破片	6	0	0
合計	6	0	0
備考	サヤの内側に白土化粧を施したもの3片あり		

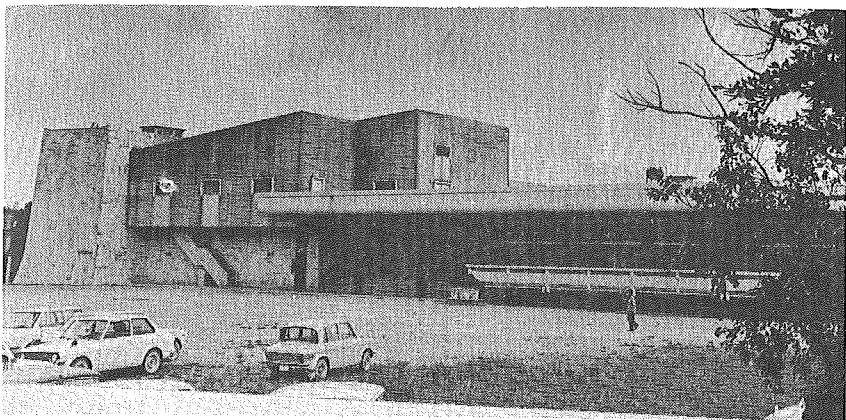
クティー、窯壁の破片

大小合わせて77片あり
(その内、灰釉碗4片の附着したもの1、
花活破片が附着したもの1)

(第五表)
その他

アンダーガーミのフタ	3片
アンビンの注口	1片
香炉の破片と思われるもの	4片
嘉瓶の破片と思われるもの黒釉5片 飴釉1片	
アンダガーミの底部と思われるもの	1片
香炉の底部と思われるもの	14片
素焼の皿	1個体(口縁部附着1)
不明陶片	上焼31片
混入したと思われるもの	荒焼49片、 アカムヌー27片、赤瓦8片、磁器染付 2片、中国青磁1片

(案 内)



名 称 琉球政府立博物館

所 在 地 沖繩県那覇市首里大中町 1 の 1 (TEL 32-2243)

開 館 日

日・火・水・木・金・土

午前 9 時～午後 5 時

(但し、入場券の発売は午後 4 時半まで)

休 館 日

毎月曜日・公休日その他陳列替等による
臨時休館日

入 館 料

大 人 10 仙

学 生 (大学生) 5 仙

児童生徒 (高校及び小中学生) 2 仙

※ なお、20名以上の団体見学は2割引とする。

沖繩県立博物館

琉球政府立博物館

那覇市首里大中町1の1

琉球政府立博物館報 No.4 1971年5月30日発行 印刷 北部高速印刷
電話 052-2540-3391